日本海海戰に於ける捷報天聽に達するや、五月三十日聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎に左の勅語を賜つた。

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峽ニ邀擊シ奮戰數日遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ
朕ハ汝等ノ忠烈ニ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ惟フニ前途ハ尙遼遠ナリ汝等愈ヨ奮勵シテ以テ戰果ヲ全フセヨ

五月三十日聯合艦隊に勅語を賜はると同時に、海軍に左の勅語を賜つた。

我海軍ハ籌畫攻戰滅共ニ宜シキヲ得中外相待テ敵ノ艦隊ヲ殲滅シ以テ朕カ望ニ副ヘリ
朕深ク其偉功ヲ嘉尙ス汝等益努力シテ大成ヲ期セヨ

わが聯合艦隊が能く勝を制して、前記のごとき捷利を收め得たのは、一に、天皇陛下御稜威の致すところであつて固より人爲の能くすべきところでない。とくにわが軍の損失死傷の僅少だつたことは、歷代神靈の加護に由るものと信ずるの外はなく、加へてこの勅語を拜した長官以下將卒の胸中や如何、唯感激の涙あるのみであつた。

日本海大海戰で始めて感狀を授與せられたものは左の九通に上つてゐる。しかしそれは個人に對してゞはなく、一艦若くは一隊である。

○假裝巡洋艦信濃丸——(艦長大佐成川揆)
○軍艦和泉——(艦長大佐石田一郎)
○軍艦千早——(艦長大佐江口鱗六)
○第五驅逐隊——(司令中佐廣瀨順太郎、不知火艦長少佐桑島省三、叢雲艦長少佐島內桓太、夕霧艦長田代巳代次、陽炎艦長大尉吉川安平)
○第四驅逐隊——(司令中佐鈴木貫太郎、朝霧艦長少佐土師勘四郎、村雨艦長少佐小林研藏朝潮艦長南里國一、白雲艦長少佐鎌田政猷)
○第十一艇隊(司令兼第七十三號艇長少佐富士本梅次郎、第七十二號艇長大尉笹尾源之丞、第七十四號艇長大尉太田原達、第七十五號艇長大尉河合退藏)
○第一艇隊——(司令兼第六十九號艇長少佐福田昌輝、第七十號艇長大尉南郷次郎、第六十

七號艇長大尉中牟田武正、第六十八號艇長大尉寺岡平吾）

○第十七艇隊――（司令兼第三十四號艇長少佐青山芳得、第三十一號艇長大尉山口宗太郎、第三十二號大尉人見三郎、第三十三號艇長大尉河北一男）

○第十八艇隊――（司令兼第三十六號艇長少佐河田勝治、第六十號艇長大尉岸科政雄、第六十一號艇長大尉宮村暦造、第三十五號艇長大尉副島村八）

○第九艇隊――（司令兼蒼鷹艇長中佐河瀬早治、雁艇長大尉粟屋雅三、燕艇長大尉田尻唯二鴿艇長大尉井口第二郎）

○第十艇長（司令兼第四十三號艇長少佐大瀧道助、第四十號艇長大尉中原彌平、第四十一號艇長大尉水野廣德、第三十九號艇長大尉大金實）

○驅逐艦漣――（艦長少佐相場恒三）

○驅逐艦陽炎――（艦長大尉吉川安平）

捕獲艦の回航は簡單のやうだがその實頗る危險であり且困難であつた。敵艦には第一戰隊と

第二戰隊から何れも捕獲回航員を派遣することになつて艦隊と共に佐世保に回航した。

敷島副長海軍中佐山田猶之助はイムペラートル・ニコライ一世を佐世保に回航したが、ニコライ一世は後に壹岐と改名した。また朝日副長海軍中佐東郷吉太郎はアリョールの捕獲指揮官となつたが、非常に苦心の結果舞鶴に入港した。この艦は石見と改名せられ、わが艦隊に編入されるに至つた。

次いで出雲副長海軍中佐上村經吉は、ゲネラル・アドミラル・アプラクシンの捕獲指揮官となつて佐世保に回航したが、アプラクシンは沖島と改名した。常磐副長海軍中佐上村翁輔はアドミラル・セニヤーウヰンの捕獲指揮官を命ぜられ、佐世保に入港したが、このセニヤーウヰンは兒島と改名せられた。驅逐艦ベドウイは皐月と改名せられた。ベドウイは漣が曳航して佐世保に向つたことは前記の通りである。

二、東郷聯合艦隊司令長官とロ提督

五月三十日佐世保に入港した東郷聯合艦隊司令長官は、すぐに三笠分隊長山本大尉をロジェストウエンスキー提督の乗つた驅逐艦ベドウイに遣し、病衣を同提督に贈り負傷を見舞はしめた。

そこで山本大尉は先づ參謀長コロン大佐に面會して東郷長官の意を傳へ、病衣を贈るとコロンは感激の色を浮べて深く東郷長官の厚意を謝した後、

「ロ提督は負傷以來甚しく神經過敏となつて居られるので、貴官にお目に掛ることは負傷に障りはせぬかと恐れます。東郷長官の御芳志は小官よりよく傳達致しますから、惡しからず御賢察下さい」

これを聞いた山本大尉は直ちに快諾して同艦を辭し去らうとした。するとそこへ大勢のロシ

ア將校が寄つて來て海戰の結果を煩さいほど訊ねた。山本大尉は氣の毒に思つて、有の儘に說明してやると、彼等は非常に驚愕して中には呆然自失の體になつた者もあり、俄かに天帝に祈禱を捧げたりした者もあつた。やがて退艦しやうとすると、さつきのコロン大佐が慌しく追つて來て、

「山本大尉殿、ロ提督が是非面會したいとのことです。今一度お戻り下さいませんか」

と懇願したので山本大尉は引返した。丁度ロ提督はわが海軍病院に移されやうとして汽船にあつたが、臥床の儘、山本大尉を迎へ深く東郷長官の厚意を感謝した。さうして海軍病院へと運び去られて行つた。

東郷長官とロ提督が會見したのは六月二日のことである。東郷長官は秋山參謀と山本大尉を隨へてロ提督を病院に尋ねた。まづ戸塚院長の案内で提督の病室に至り、戸口の邊に佇立して、山本大尉をして訪問の旨をロ提督に通ぜしめると、同提督はすつかり血の氣の失せた面上に驚喜の色を浮べ、繃帶せる頭を僅かに擡げて敬意を表した。それは正に劇的シーンだつた。

東郷長官も莊重にこれに答へて病床の側に進み握手をしながら凝つとその顏を見詰め重々しく口を開いた。

「御氣分は如何であるか深くお察し致してをる。申すまでもないが、勝敗は兵家の常であつて必ずしも恥づるに及びませぬ。要はその本分を盡したか否かにある。貴艦隊が遙々一萬五千浬を航破せられたその技倆のみでも、決して尋常一樣のことではないのに、二日にわたる海戰において貴艦隊の將卒が勇戰奮鬪の狀は、我々の感服したところで、殊に貴官が重傷を負はるゝまで、敢然として提督の大仕を盡されたるに對し、本官は衷心より敬意を表すると同時に最も痛心に堪へないのである。當病院は病院としての設備よりないので、定めし御不自由勝であらうが、何率自重自愛の上、一日も速に快癒せられんことをお祈り申す」

その言葉はまことに慇懃叮重、誠意は言外に溢れてゐた。ロ提督の面上には、見る〳〵感激の色が漲つて眼の中には涙さへ浮んでゐた。

「予は名譽高き貴官の御訪問に接したのをまことに光榮とするのみか、貴官の御溫情は小官を

して負傷の苦痛を忘るゝまでの慰藉を得しめた。まことに感極つて云ふところを知らない。たゞ胸中をお察し下さい」

こう云つてロ提督は愁然として瞼を閉ぢた。このロ提督は戰後ロシアに歸國し、軍法會議に附せられたが審問の結果釋放せられ、爾後病院の轉地先で明治四十一年の夏、淋しくこの世を去つたのである。

日本海大海戰で大敗したバルチック艦隊のうち遁走した敵艦は數隻に上つてゐる。卽ち巡洋艦オレーグ、同アウローラ、同ジエムチウグの三隻は司令官エンクウイスト少將にひきゐられマニラに遁竄して、アメリカ政府のために抑留せられたが後に至つて武裝を解除された。巡洋艦アルマーズ驅逐艦ブラーウイ、同グロースヌイの三隻はウラジオストックに遁走し、巡洋艦イズムルードはウラヂーミル灣に入つたが擱座して破壞するに至つた。驅逐艦ボードルイ、特務艦コレーヤ、同スウキーリは上海に逃れて武裝を解除され、驅逐艦ブレスチヤーシチーもまた同所に逃れんとして中途に沈沒し、特務艦アナヅイリは本國に逃走した。

また敵艦隊のうち戰場に臨まなかつた艦船は、ロシア太平洋第二、第三艦隊に屬した假裝巡洋艦五隻の內でテレーク及びクバーニの二隻があり、戰前琉球附近で艦隊と分離しわが東海岸を作動したやうである。しかし、テレーク及びクバーニはつひにその姿をわが沿岸に現はさず歸國の途に就いたものゝやうで、しかもテレークのみは六月五日英國汽船や蘭國汽船、デンマーク汽船などを臨檢又は擊破して隨所に問題を起してゐる。クバーニは無事本國に歸航した。

リオン及びヅネーブには各自個々行動し、リオンはドイツ汽船を擊沈し、また英國汽船を臨檢した上で本國に向つて發航した。ヅネーブルはこれも英國汽船を臨檢した後擊沈し、蘭國汽船、ドイツ汽船を臨檢した上で歸國した。

全艦隊中、戰鬪に堪へ得るものは殆んどなくウラジオストックにある艦隊中にも僅かにローシア及び若干の水雷艇のみであつたゝめつひに出動しなかつたと云はれてゐる。

日本海軍の名聲を不朽ならしめ、今なほ世界に一種の謎として驚かれつゝある日本海大海戰はかくして終つた。遙々萬里の波濤を蹴つて東亞の急に赴いた數十隻の大艦隊は、僅か二日間

の戰鬪に影も形もなく全滅してしまつたのである。想へば艦隊東航は、果して何の爲なりしかをさへ疑はるゝではないか。素より全滅を豫期した譯ではなく、必勝を期し、ウラジオストックに着航して、我が制海權を奪はむとする計畫であつたことは明らかである。それにしても餘りにも夢に似た最後の敵ながら悲慘なる極みではないか。

日本海大海戰當時、國內の新聞社より發行した新聞號外は、銀座で十錢、神田で五十錢、本鄕で二圓と云ふ暴騰記錄を作つた。新聞社は工場の窓口から號外を卸した。號外賣は餌のやうに密集して爭ひ、その號外を仕入れることがまた大變な騷ぎであつた。その號外を手にした人は、或はこれを電柱に張り、樫の棒を持つて張番し剝がしに殺到する群衆を整理した。或はこれを近所隣りに見せて歩く。と幾十人が町の廣場に集つてバケツや金盥を叩いて萬才を絕叫した。——その號外は、バルチック艦隊第二戰隊旗艦オスラビアの擊沈、第一戰艦隊旗艦スオウロープ及び戰艦アレキサンダー三世の大破と多數の敵艦の火炎等を報じてあつた。國民の熱狂は形容を絕した。そこに全國民の心を永く壓迫してゐた大海戰の勝敗に關する深憂があつたの

である。その艦隊が全滅し　日露戰爭の完全大勝が確立したのだから、國民の歡喜が爆發したのは當然である。

嗚呼これ何たる大勝利ぞや。吾人は陸戰においても、海戰においても、歷史上未だ曾て斯の如く完全なる大勝を見た事がない。實にこの海戰はトラファルガー海戰に比較しても、その規模遙かに大である。かくてこの海戰は、人類の歷史上に一新紀元を畫した。

ハワイ・マレー沖海戰

第一　大東亞戰爭

一、米英軍と戰鬪狀態に入れり

昭和十六年十二月日の早曉、驚く可き世紀の瞬間は忽ちにして全世界に展開した。東亞新秩序建設に飽くなき妨害を試み來つた米英兩國に對し、畏くも宣戰の大詔が渙發され、皇軍の精鋭は間髪を容れず敵の意表に出で、廣袤實に數に數千浬にわたる太平洋に點在するその要衝に勇猛果敢一齊に攻擊し、殆んどこれに潰滅的損害を與へ、或は又各地に壯烈なる敵前上陸作戰

を敢行して、米英をして呆然爲す所を知らしめない程の大戰果を收めたのである。

その日の朝、二重橋下のお濠の中から平和のシムボルのやうな二羽の白鳩がはた〳〵と羽音をたて〻飛び立つた。

「大本營陸海軍部發表」(十二月八日午前六時)帝國陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戰鬪狀態に入れり

白い鳩が飛び立つたのは此の重大發表のあつた實にその瞬間のことであつた。この歷史的早朝、宮城前に一番乘りして遙かに至尊に向ひ奉り、土下座して居たのは下谷區上野の泰東商業學校と深川區修德商業學校の、二百名の勤勞奉仕隊であつた。

「う〻む!」

と、道往く人達は何れも大きく唸つて居る。そして、

「オイ、や、やつたぞ!」

と、口々から或は鮨詰の出勤電車の中から決意のどよめきを擧げて居る。一億一心の合言葉が

今ぞ斷乎として發せられたのである。うら若い產業戰士が輝く眼と眼を見交はして、緊つかり手を握り合ひ、其傍を勤勞奉仕隊の中學生が汗みづくになつて車を引つ張つてゆくのを眺めて、

「學生諸君、賴むぜ」

「やるよ、しつかりやるよ」

何かは知らぬが涙が滾れさうなのをぐッと怺へて率く手に車が滑つて行く。蜿蜒と職場に急ぐ人々の鐵石の決心を眉宇に固めた力强い進軍だつた。戶毎々々から流れ出す臨時ニュース、

「帝國は忍び難きを忍び……」……聽く人總てが、「さうだ! それでい〻のだ!」と、うなづきながら双頰は紅潮する。漸く我等の胸も燃える。號外の鈴の音は、勇ましく天空に響き、民草の熱血と偕に遠く谺する。號外の鈴の音もいつしかぱッたり杜絕えて、

「けふばかしは賣つてるこつちも武者ぶるひが出たぜ」

と、號外賣のお爺さんが述懷する。號外は見事に賣切れたのだ。宮城前へとまた戻る。勤勞

奉仕へといつもの通り夜明けに出た學生等はラジオと號外とに胸を湧き立たせて玉砂利に額いてゐたが、やがて立去つた。と、續いて會社員等がくる。學生が、官吏が、女事務員等が、國民學校の生徒等が、老幼男女がすべて低く〳〵頭を大地につけてゐる。決意を固めたのである。同日午前十一時五十分と午後一時の二度にわたつて左の如き發表があつた。

〔大本營陸海軍部發表〕(八日午前十一時五十分)わが軍は陸海緊密なる協同の下に今八日早朝マレー半島方面の奇襲上陸作戰を敢行し着々戰果を擴張中なり。

〔大本營陸海軍部發表〕(八日午後一時)帝國海軍は本八日未明シンガポールを爆擊し大なる戰果を收めたり。

〔大營本海軍部發表〕(八日午後一時)帝國海軍は本八日未明ハワイ方面の米國艦隊竝に航空兵力に對し決死的大空襲を敢行せり。

火の玉を抱いて突進せんとするわが國民の總意はこゝに凝集して、この朝の何たる凛烈さであつたらう。山には雪、大地には霜置いて、國民の試錬を求める朝、皇軍はつひに起つたので

ある。午前六時大本營發表から同七時五分から十五分間の臨時重大閣議、東條英機首相の參內、それからつひに同十一時、嚴かにも宣戰の大詔が渙發せられたのである。やがてさし昇る朝暾、日の神はほゝえましくかゞやきわたり、師走八日、歷史に殘る朝は明けて、帝都はまさに日本晴、號外が飛散し、鈴は鳴り、ラジオが時ならぬ樂音を放送した。そして最初の午前七時の臨時ニュースだつた。

瞼を閉づれば西太平洋の海に空に征きに征くはつものゝ姿が浮ぶではないか。隱忍自重の兜の緒も切れて、われら一億の民草は、皇國百千萬年の運命を切り拓くために、いかなる長期戰をも戰ひ拔かねばならないのだ。百年戰爭なんのその、勝て、勝て、勝て！ 屠れ米英われらの敵だ、思はず叫ぶ胸の內、赤子の群はやがて宮城前へ、明治神宮や、靖國神社へ、決死の祈願である。

この日の滑稽なエピソートは、駐日米英兩大使の驚愕した擧措であつた。——傲岸なグルー米大使が東郷外相に招致されて麴町三年町の外相官邸に駈附けたのは午前七時半であつた。薄

茶色の大柄な、白つぽいオーバーに鼠色のソフト、こんな瀟洒ないでたちで、いつもの穩やかなゝかにも人を食つたやうな表情を緊張にひきつらし、あたふたと官邸二階の客室に上つた。

東郷外相は昨夜二時間しか眠つてゐなかつた。が、六時にはもう床を蹴り、モーニングに着換へると島津秘書官に米大使館を呼び出させたのである。

この二人が朝の光の射し込む客室のソファーに相對して坐つた瞬間、海の彼方ワシントンでは野村・來栖兩大使が、ハル國務長官を訪問し、過去九ケ月に渉る日米交渉を清算する帝國の「對米通牒」を手交してゐたのである。——同じものが、今、大型の封筒に納められて東郷外相からグルー大使に手交されたのだ。

介添役の加瀨アメリカ局課長の蒼い顔がこの日はまた一入冴返つて清澄だ。十數分間の東郷・グルー對談が終ると、加瀨課長は、急に表情を崩して、客室から廻り階段をニコやかに老大使を送り出してきた。平生「太平洋の平和のために全生涯を捧げ盡す」と語つてゐたこのグルー大使も、血迷ふホワイト・ハウスの犠牲となつてつひにいまその使命の終結を迎へなければ

ならなくなつたのである。

外相にも送られ、自動車の扉(ドア)を開けるこの悲劇の大使の頭髪は、雪のやうに白く、強度の眼鏡の奥にいつもは決して見られなかつた苛々した光りが苦つぽく走つてゐた。——自動車は音もなく走り去つた。

續いて同八時、英大使クレーギーが、黑いソフトに黑のオーバーといふ喪服のやうな服裝であたふたと飛び込んで來た。——「對米通牒」と同じ内容の「對英通牒」が、參考として東郷外相から提示された。その封筒をむき出しのまゝ小脇に抱へて出てくる孤影悄然たるクレーギー英大使の態度も、玄關にて送迎する外務屬が、吃驚するほど突堅貪なものだつた。

二、帝國政府の最後通牒

日本の英米に對する最後通牒は今後は、獨自の見解においても大東亞新秩序建設の目的過成

のため、斷乎自主的行動を開始すべく決意したからに外ならないのである。日本はその開戰理由として左の五項にわたつて堂々と中外に闡明した。

1、日米交渉における米國の原則は架空の理念にして多邊的不可侵條約のごとき舊態依然たる構想で東亞の實情と遊離してゐる。

2、英米の帝國主義的搾取が東亞の禍根であつて、佛印の共同保障案またその野望の暴露に過ぎない。。

3、援蔣行爲の依然たる繼續は斷じて默視し得ず。

4、英米が敵性諸國家群と通謀日支相鬪はしめんとする策動を排す。

5、英米の經濟壓迫は武力にも增して卑劣極まるものである。

かくして過去八ヶ月間、太平洋の平和維持確立のため絶間なき努力と忍耐とをして來た帝國政府の希望は遂に失はれ、玆に米英兩軍と戰鬪狀態に入つたが、その責仕は總て米英側に存すること勿論である。

誰かの歌に「敷島の大和ごころを人とはば蒙古の使節斬りし時宗」と云ふのがある。六百年前北條時宗の決意そのまゝが、東條首相の決斷となつて發揮されたのである。二千六百年の光輝ある歴史と、一億國民の運命とを賭けた決戰の幕は遂に切つて落されたのだ。世界の全民族を驅つて貪婪飽くなき物資と金權の奴隷たらしめようとしつゝある英米に對する膺懲の大聖戰は開始されたのである。

神代から承けついだ天孫民族の血は、脈々として我らの血管を流れてゐる、ユダヤ財閥の手先きでしか有り得ないルーズヴエルト政權は、最後まで日本を物質的打算的に觀測し、よもや立上りえまいと甘く見くびり、傲慢無禮の限りを盡した。彼等の腐つた心裡では、光輝あるわが國體の尊嚴さは分らない。彼等の曇つた眼には日本民族の眞精神は把握出來なかつたのである。されば こそハワイ・マレー沖、シンガポール、ヂヤバ、珊瑚海等の敗戰に於て醜態を晒すに至つたのだ。

この日、畏くも、

大元帥陛下には、霜凍る早曉にもかゝはらせられず、午前二時起床の上、御軍裝も凛々しく、大奥より宮中表御座所に出御、同三十分緊急參内した東郷外相より日米會談の結果、三十分餘にわたつて御聽取遊ばされた。

陛下には、火の氣もなき御座所において、深夜の奏上を聽し召されたことは御稀のことであつた。外相と相前後して、木戸内府、百武侍從長等も參内、深夜から未明にかけての大内山には、緊張の氣漲り、引續いて午前十時七分には原樞相以下各顧問、官同二十二分には軍裝に緊張の東條首相をはじめ、各閣僚が續々參内、臨時樞密院會議が開催されるなど、畏くも、陛下には御起床遊ばされて以來、御軫念のあまり、御一睡もあらせられぬと拜承するのもまことに恐懼に堪へない次第である。

而してこの日、午前十一時四十分、畏くも、宣戰布告を渙發あらせられた。

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一世系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ

今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアル豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇護ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平

和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ
朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ
精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却テ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我
ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡
ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一
切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除
シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

各大臣副署

この戰爭たるや、帝國の生命と權威を蹂躙しようとする米英政府の東亞攪亂の迷夢を覺醒せ

しめるためには、殘された唯一の途であり、帝國は米英の指導する對日包圍陣を打破し、始め
て生存と權威を確保し、事變處理と大東亞共榮圈の確立を達成し得るのである。軍官民一體と
なつて、國難を突破する用意はまつたくなつたのである。詔勅を拜し奉るや東條首相は同日午
後零時二十分、ラジオによつて政府聲明を發表した。

宣戰の大詔と政府の聲明、民草はひとしく溜飲の下がる思ひがした。殊に宣戰布告は、日清
日露と日獨戰以來二十八年ぶりに聞くそれであつた。宣戰とは、相手國と戰爭狀態に在るとい
ふ事を一方的に意思表示すれば、それが國際法上の宣戰で、たとへ兵力の衝突が無くとも、爭
戰の開始と認められてゐる。このほか戰爭の開始は、最後通牒に時限を明かにして解答を求め、
應ぜざる時は直ちに戰爭に入るといふ〝宣戰〟を條件とした通牒を發する場合もあるが、此前例
は稀にしかなく、或點まで餘りないと云つたはうがいゝ。寧ろ戰爭の意思をもつて、まづ戰鬪
行爲を開始しおもむろに宣戰する場合が多く、第二次世界大戰でドイツが、ポーランド、英佛
ソ聯などに對して行つたのも此例である。なほ、此の宣戰の大詔渙發前に、戰爭の意志は外交

アメリカ陸海軍の日曜勤務日に當り兵力が手薄であつたゝめ完全に虚をつかれた觀があつた。日本空軍の爆撃のため眞珠灣上空には爆煙が立ちこめ空襲一時間、大爆撃の音が聞かれた。當地陸軍報道機關では「眞珠灣が日本空軍の爆撃をうけたがなほ詳細不明である」旨聲明した。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノルルよりのNBC放送によれば日本軍のホノルル爆撃は熾烈を極めてゐる。しかし、米國陸海軍は今なほ制海空權を握つてゐる。また日本軍の空襲は三時間近く繼續してゐると。

〔ワシントン七日發同盟〕 ルーズヴエルト大統領は日本飛行隊の攻撃はオアフ島のあらゆる軍事施設に向つて加へられた旨發表した。

〔ワシントン七日發同盟至急報〕 ホワイトハウス發表によれば日本軍のオアフ島空襲による被害は甚大。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノルルのUP電によれば眞珠灣西方のバーバーポイント沖に

日本軍を積載せる日本船の影が認められたと。

〔ブエノスアイレス讀賣特派員發〕 日米開戰の報道は七日午後六時半前後、各放送局によつて放送されたが、眞珠灣の空襲、ピックマン飛行場爆破、戰艦オクラホマ號（二萬九千トン）の火災）、シンガポールの急襲ロンドン政府の受けた大衝撃などを洪水の如くブエノスアイレス市民の耳にぶち込んだ。

緒戰において日本海軍のために、事實アメリカの大艦隊は、殲滅的大打撃を蒙つたのである。正直なところ、餘りの大戰果に、一億同胞は誤報ではないかと、しばし耳朶を疑つた。しかし、勝利は我に、榮光燦たる歴史的十二月八日早朝、わが精鋭海鷲部隊は、開戰の劈頭、巨彈を抱いて曉のハワイ眞珠灣にアメリカ太平洋艦隊を奇襲し、一擧にして太平洋艦隊を全滅し去つたのだ。世界驚倒のこの偉勳戰史を飾るハワイ大海戰！ 何といふ光輝、感激！ 曉闇の強風をついて勇躍進發する壯烈な情景から勝利を祝福する爽やかな、南海の朝日を浴びて、母艦にかへるまで、——總ては皇國の興廢をこの一擧にかけ、生死を超越したあくなき海鷲魂の

使臣を通じて表示されてゐるから法的にはこれが宣戰となるわけである、

宣戰の場合、一つ注意すべきことは、宣戰を行つた後なら實戰鬪は行はなくても、戰爭狀態は開始され、交戰國でなくては行ひ得ない種々の措置が取り得られることで、敵國人を必要に應じ保護收容したり、復仇行爲として敵國が不爲行爲をした時は報復も出來るわけである。——前大戰で、支那は、一九一九年ドイツに對し宣戰を行ひ、一回も實戰鬪をなさずに交戰國として講和會議に出席したやうないゝ例がある。今度戰鬪力を持たぬ反樞軸諸國も此例に入るであらう。

なほ、宣戰と同時に外交使臣である大使や公使は、その特權を失ふが、安全に歸還する權利は有し、旅券を下附しまた國境或は占領區域を安全に通過出來る安導券といふものを渡すことになつてゐるが、交通機關のない場合は特にその心配までしてやる必要なく、そして双方の使臣が交換されるといふ場合も生じて來る。——アメリカは彼我の大使の交換を申し込んで來た。

第二　ハワイ海戰の全貌

一、母艦上のZ旗

日英米戰の劈頭、一億の人心を極度に驚喜せしめた大本營海軍部發表の報道と續いて報道された新聞ニュースは、慥かに二千六百有餘年の光輝ある帝國をどよめかした未來の響きであつた。

〔大本營海軍部發表〕(八日午後一時)帝國海軍は本八日未明ハワイ方面の米國艦隊竝に航空兵力に對し決死的大空襲を敢行せり。

〔ホノルル讀賣新聞特電〕(至急報)　日本空軍によるハワイ、眞珠灣の爆擊は偶々ハワイ駐屯

アメリカ陸海軍の日曜勤務日に當り兵力が手薄であつたゝめ完全に虚をつかれた觀があつた。日本空軍の爆撃のため眞珠灣上空には爆煙が立ちこめ空襲一時間、大爆撃の音が聞かれた。當地陸軍報道機關では「眞珠灣が日本空軍の爆撃をうけたがなほ詳細不明である」旨聲明した。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノルルよりのNBC放送によれば日本軍のホノルル爆撃は熾烈を極めてゐる。しかし、米國陸海軍は今なほ制海空權を握つてゐる。また日本軍の空襲は三時間近く繼續してゐると。

〔ワシントン七日發同盟〕 ルーズヴエルト大統領は日本飛行隊の攻撃はオアフ島のあらゆる軍事施設に向つて加へられた旨發表した。

〔ワシントン七日發同盟至急報〕 ホワイトハウス發表によれば日本軍のオアフ島空襲による被害は甚大。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノルルのUP電によれば眞珠灣西方のバーバーポイント沖に

日本軍を積載せる日本船の影が認められたと。

〔ブエノスアイレス讀賣特派員發〕 日米開戰の報道は七日午後六時半前後、各放送局によつて放送されたが、眞珠灣の空襲、ピックマン飛行場爆破、戰艦オクラホマ號（二萬九千トン）の火災）、シンガポールの急襲ロンドン政府の受けた大衝撃などを洪水の如くブエノスアイレス市民の耳にぶち込んだ。

緒戰において日本海軍のために、事實アメリカの大艦隊は、殲滅的大打撃を蒙つたのである。正直なところ、餘りの大戰果に、一億同胞は誤報ではないかと、しばし耳朶を疑つた。しかし、勝利は我に、榮光燦たる歴史的十二月八日早朝、わが精鋭海鷲部隊は、開戰の劈頭、巨彈を抱いて曉のハワイ眞珠灣にアメリカ太平洋艦隊を奇襲し、一擧にして太平洋艦隊を全滅し去つたのだ。世界驚倒のこの偉勳戰史を飾るハワイ大海戰！ 何といふ光輝、感激！ 曉闇の強風をついて勇躍進發する壯烈な情景から勝利を祝福する爽やかな、南海の朝日を浴びて、母艦にかへるまで、——總ては皇國の興廢をこの一擧にかけ、生死を超越したあくなき海鷲魂の

極致であり、死闘であつた。

その前夜、――明日愈決行と決つた時、艦内は異常な元氣に溢れてゐた。司令官が搭乘員を全部集め、自分で酒肴を持つて來て、一同に馳走した。そして云つた。

「日本が生きるか死ぬかは搭乘員の全部の双肩に掛つて居る。怎うかしッかりやつてくれ」

と、涙を流さんばかりに勵ました。そして或隊長は、白頭山節で次のやうな歌を作つた。

一、大事決して鳴る腕隠し
　○○○○○○○
　夢で笑つた内蔵之助

二、○○○○○○○
　荒海乗り出す軍艦（いくさふね）
　めさすハワイは夏とやら

三、男、度胸は奇襲のいくさ

　ひよどり越に桶狭間
　明日はハワイに彈（たま）の雨

これを皆で唄つた。又○○艦でも數へ歌を作つて、皆で大いに唄つたものだつた。そして銘々各自の愛機に御神酒を上げに行くと、整備員が自分のお守りをわざ〳〵外して飛行機の計器に貼りつけてゐた。戰地へ行くと互ひに自分の飛行機が本當に可愛くなる。自分の飛行機ぐらひ好いものはない。日の丸の鉢巻を取り出し、飛行帽を取り出したりして、墨黑々とそれに「必殺」とか「必勝」とか一杯書いて行つた。

或兵は七日の晩に記錄掛をしてゐたので八時頃まで起きてゐた。今度の空襲は、初めての者が多かつたので、興奮して寢られぬだらうから皆早く寢よと云はれてゐた。航空兵は寢不足が一番いけないのである。普通の時でも空を飛んでゐると、眠くなることがあつて危險なことがあるのである。――ところが八時頃、室に歸つてみると、皆高いびきであつた。起きてる者は一人もない。ゆつたりしたものであつた。それを見て記錄係の航空兵は、非常に心強い氣持が

した。張り切り方は平常とは違つてゐたが、その他のことは普段とも些つとも變りはなかつた。戰爭だからといつて特に興奮したり取り亂した者はなかつた。さすがは日本の軍人魂、立派なものだつた。

しかし、ハワイ攻擊との作戰はその數刻前まで知らなかつた。——その前に上官から、近く第一線に行けると云ふことを聞かされてゐて、その幸運に勇躍してゐたのであるが、それがハワイであるとは知らなかつた。それでそれまでは電熱服を用意したり、寒さの支度ばかりしてゐた。誰も「死ぬかも知れない」といふことは考へたこともなかつた。忙しくてそんな悠長なことは考へる暇はなかつた。常に死生を超越してゐる彼等は、毎日爆彈を積んだり、魚雷と積み換へたりして、なか〳〵忙しいのである。

やがて十二月八日の早が靜かに訪れた。朝と云ふより深夜に總員起床した。整備員など搭乘員より二時間も早く起きてやつてゐた。風は強く雲が低く垂れ込めてゐて、瞬く星など一つも見えない無氣味さが却つて一同を緊張させてゐた。

段々決行の時が迫つてくる。艦内はとても慌しく忙しくなつた。旗艦にZ旗が上り信號が擧うた

——皇國の興廢か〻りてこの一戰にあり、各員粉骨碎身その任務を全うせよ

司令からもまた別に次のやうな揭示が出た。

——皇國の興廢との一戰に各員あり、一層奮勵努力せよ。

東鄕元帥のと同じであつた。それらを見た時、本當に身體が寒いやうな、今まで嘗て知つたことのないぶる〻つと身慄ひを感じたものだつた。

それは各分隊の黑板にも、酒保の前の通路にも貼り出されてゐた。母艦は、その時一刻々々とハワイ方面に近づいてゐた。强い波しぶきをあげて走る艦上で、何度も〳〵それを讀んだものである。

その前後は、艦が隨分かぶつた。普通ならこんな波の荒い時は若い兵は殆んど波に醉つぼらふものであるが、この時ばかりは誰一人醉ふ者がなかつた。——醉ふと汚ない話だが、便所に

洗濯桶を持つて行つて、とにかくひどくあげるものである。飯は食へない。それがあの決行前には、ひどくかぶつてゐるなかで、御飯が足りない位だつた。それだけ全員張り切つてゐたわけである。

或る〇〇中尉は、責任の重さから、飛行甲板に用意された自分の愛機の下に帆布を敷いて、その上に寢て居つた。前夜のことだ。〇〇中尉は愛機を甲板に出し、胴體の下にはすでに魚雷を抱かせ、座席には機銃を備へた。そして燃料を積み込んで、歸らぬ覺悟の出發準備を整へた。愛機はいつでも飛び出せますよと云ひたげに、微かなむらさき菫のごとく搖れてゐる。

（明日の朝までの辛棒だ！）

と、しつかりと繫止鏈を掛け、動搖止を當てる。小山のやうな大浪がどーんと舷側に突き當つて、艦橋までしぶきを打ち上げるたびに、飛行機はギシ〳〵と軋んだ。この動搖で、もしも機の翼でも毀されたならば、明日はおいて行かれてしまふかも知れないぞ！　と考へると、その夜は悠くり休んで置かねばとはおもふのだが、どうしても愛機の側を離れることが出來ない

のであつた。

そこで、古い帆布を格納庫から捜して來て、それを飛行機の下の甲板に敷き、いつでも出發の出來るやうに飛行服を着たまゝ、そこに寢てしまつたのだ。

中尉の横には、いつの間に來たのか、同乘して征く偵察員の〇〇兵曹も同じやうな恰好で寢てゐた。——起き上つて時計を見たが、暗くて見えない。星は螢火のやうだ。しかし、もう夜明けに近かつた。艦橋には大分人影が動いてゐるやうだ。整備員だ。どのくらゐ眠つたのであらう。眠つたとしてもほんの一寸くらひだ。身體の節々がとても痛かつた。〇は大の字に上を向いたまゝ、腕を組んでゐた。風は大分落ちたやうだが、艦の動搖は依然として大きい。ぐうつと搖り上つては、すうつと奈落へ落ちてゆく。とてもエレベーターとは比較にならない。とき〳〵大きなうねりが遠慮會釋もなく押し寄せてきた、艦がそのうねりに乘ると、ごろんと身體が裏返しに一廻轉されさうである。

頭がだん〳〵氷のやうに冴えて來た。艦橋の人影を見ると、がばりと起上つて、急いで私室

に走つた。合戰準備をして、部屋の窓は二三日前から全部、一粍の一萬分の一の隙間もないやうに、鐵蓋をピッタリ閉めてあるので、這入る途端にムッと匂つた。○○中尉は急いで飛行服を脱ぐと、爆擊に行くときは必ず、これを着て行け、と、母が編んでくれた毛絲のチョッキを出して着た。また初陣に際して見苦しきことなきやうといふ手紙と一緒に送つてくれた白絹のマフラを飛行服の上から頸に卷いた。——母の命令とほり、このチョッキを着、白絹のマフラをして敵海軍の根據地ハワイに永眠に眠つたと聞いたら、母もどんなにか喜んでくれやう。

（十二月八日だな）

と、ふと思ふ。

時は迫つた。

二、司令官と艦長の訓示

けふ程波が高いと練習の時は絶對飛ばない。しかし、けふだけは別問題で天候がどうのなんのと贅澤なことは言つて居られない。こつちの艦では、しかし、平常と何等變りなく、朝の日課を、搭乘員たちは、體操、宮城遙拜と次々と進めた。終つて、各自の飛行機の傍に歸つて、改まつた言葉など普段めつたに吐かない整備員から、しつかりやつてくれ、エンヂンは大丈夫だぞと、眼を輝やかして云はれた時は、心から、

（やるとも、ようし、やるぞ！）

と、自分に誓つたものだつた。

時が迫つてくる。飛行帽を被り、手袋をはめて準備を終ると飛行甲板に出た。夜はほのぼのと濃紫に明けようとしてゐる。○時。

「搭乘員整列！」

號令は發せられた。無言の將兵は黑々と整列した。○○指揮官は、きつぱりと云つた。

「艦長、よろし」

艦長の姿は、飛行甲板に現はれた。

「所定命令に從つて、ハワイ敵主力艦竝びに敵航空基地撃滅ッ、各員粉骨碎身、誓つてその任務を完うせよ」

總員擧手の禮につれて、艦長の白い手袋がさつと上つた。續いて全員不動の姿勢のうちに、司令官の低いが力の籠つた聲が、夜明けの空に放たれたかのやうに大きく反響した。

「……、我國千年の運命が決まる時です。總員の奮闘を切に祈る次第であります」

と、云つてから特に、「搭乘員各位は」と、改まつて、

「一大勇猛心を起して奮闘を祈ります。自分は皆さんが無事空襲を終つて歸つて來られるのを艦上で何時までもじつと待つて居ります」

まるで目上の者に云ふやうな言葉だつた。司令官の云はれた訓示は何といふか、嬉しくて男なきに泣けてくるやうだつた。みんな心で泣いてゐた。一同は、〝この自分等が閣下からあんな叮嚀な言葉で激勵されるとは何たる光榮何たる感激であらう〟と、おもふと、瞼から落つる涙

を、そつと拭きとつてゐる者もあつた。若鷲の或者は、手の甲で眼をむせうにこすつてゐた。

この日この朝を期しての、今日までの幾百千度の猛訓練であつたのだ。ようし、やるぞッ。

それからは、馬鹿にはしやぎたち陽氣になつて行つた。總員飛行帽の上に日の丸の鉢卷をきりりと締めて、丁度正月が來たやうな表情だつた。荒鷲にとつては正に盆と正月が一緒に來たも同然である。

母艦は、ざーつ〳〵と大浪の飛沫を散らし、全速力を擧げて東へ〳〵と驀進してゐる。舷側に碎ける怒濤のひびきが、いやが上にも若鷲たちの血潮を沸かす。そのときだつた。旗艦の檣上高く、Z旗が上つた。かつて日本海の風を孕んで聖將います旗艦三笠の檣頭高くひるがへつたZ旗は、三十七年後の今、再び太平洋の海風に翩翻とはためいたのである。

遙かなる南の風に、崇高な大和民族の理想と決意を象徴するかのやうに、ハタ〳〵と高鳴るZ旗！ かつてロシア東漸の野望を一擧に打ち碎いたこの旗のもとに、今若鷲たちは、暴戾飽くなき米英撃滅、東亞解放、新世界創造の歩武を進めるのである。雄渾限りないこの使節、こ

の誇り、振仰ぐ全員の瞳には、キラ〳〵と熱涙が光つてゐる。

全員は（さうだ！　眞珠灣上空の華と散らう。正にこれ男子の本懷、思ひ殘すこと更にない。しかし、たゞでは死なんぞ、敵艦を撃沈するまでは、どうしても死なんぞ。）

と思つた。

Z旗が靜かにおろされると、母艦は全速力で東へ〳〵と驀進しはじめた。ハワイへ！　艦の速さがはつきり意識される速さである。天候はやゝ不良、艦内は急に忙しい。航空部隊指揮官の「わが部隊は只今よりオアフ島を攻撃せんとす」と、一語々々に力を籠めて云つたビン〳〵と張りのある聲が、いつまでも全員の腸に滲み透つて去らない。あゝ今日は何と云ふ佳き日であらう。佳き星の下に海のみ民と生れたものゝよろこび、海鷲としてけふこの歴史の日を迎へた幸福が、熱いものとともに、ふつふつと、腹の底からこみあげる。

司令官は、にこやかな顔つきで、

「皆に行渡るかどうかは分らぬが」

と云つて、御下賜の煙草を搭乘員に分配した。三人に一本位の割だつた。二口三口吸ふてはの心はいよ〳〵澄んだ。

戰友に渡す。甘かつたし有難かつた。いよ〳〵出發の直前には、拳銃とマッチを貰つた。自爆の時、飛行機には祕密書類があるからそれを燒くためである。その拳銃とマッチをもつて出發だ。

死ぬとか生きるといふやうな氣持は全くない。死なぞ別に考へないが、たゞ感激の涙あるのみであつた。準備も研究も盡きるまでやつた。後はたゞ實行あるのみといふ氣持だつた。全員

「では、征きます」

指揮官〇〇中佐が艦長へのきつぱりした聲だ。征きます。さうだ。今日は「征つて來ます」ではない。「征きます」なのだ。誰一人として生きて還らうとは思はぬ。我子のやうにいつくしんで、哀歡を共にしてくれた艦長の顔もこれが見納めである。

一人々々靜かに飛行機に乘つた。前方に整列してゐる艦上爆撃機から、轟々と爆音をあげて

進發を開始した。一機又一機、

指揮官の合圖で、前後左右に動搖する不安定な甲板から飛び出して行く。いまだに海上は薄暗い。耳許にヒューヒューと風が強く鳴り、天候は相變らず惡い。北東十七メートルの風が吹き荒んでゐるのだ。

これ程波が高いと、練習の時は絶對飛ばない。指揮官が合圖して一機々々飛び出すのは、本當は波と波の間をうまく捉へて合圖するのだが、この時は、浪の合間を計るといふやうな餘裕もない。だから飛行機は次から次へと飛んで行つたのである。ローリングやピッチングは相當やつてゐた。しかし全機無事出發出來たのは天祐だつた。

——〇〇中尉は、進發の順番を待つ間、操縱桿を握つて舵を靜かに動かしながら、ふと氣がつくと、操縱桿の握手の前にお守札が貼りつけてあつた。暗いので眼をくつつけて見ると、霧島神社と讀まれた。中尉は、靜かに西の方に向つて頭を垂れた。整備員が貼つておいてくれたのだなと熱いものがぐんと來た。

「有難う！　安心しろ、エンジンは滿點だ」

中尉の番が來た。車輛止が外された。發着係の白旗がさつと下つた。〇時〇〇分、燃料コックを一杯に開いて、甲板の中央に書いてある白い線の上をまつしぐらに走つた。艦首にも艦橋にも乘員が鈴なりになつて、帽子を鷲づかみにして、高く上下左右に振つてゐる。夜明け近い甲板のサイドは溢れるばかりの人に見送られ、發艦する時の感激は名狀しがたい程だ。みんな一齊に帽子を振つてくれたのだが、いつも同じ手で振つても、その振り方が慥かに違つてゐた。

「色々有難う。必ずやるぞ」

艦橋に、不動の姿勢で擧手の禮をされてゐる艦長の姿が、ちらりと見えた。中尉は思はず後の座席に向つて叫んだ。

「艦長に敬禮ッ」

と、同時に機は甲板を蹴つて舞ひ上つた。

上空で編隊を整へながら、母艦からつぎつぎと舞ひ上つて來る僚機へ、

「しつかりやれ」

と、激勵の眼を向ける。そのぴつたりと寄つて來る僚機の姿を見かへれば、實に感慨無量であつた。今は一切の感情は吹き消されて、訓練にでも出掛ける氣持だ。大きく母艦の上空を一周して、隊形を整へると、隊長機を先頭に、一路全速力でハワイに向ふ針路に入つた。全員の意氣大いに擧り、既に敵の呑むの概があつた。空は小雨模様で雲がとても低く、山のやうな長濤がうねつてゐた。

三、航空母艦から飛び立つ

ハワイ！　米陸海軍航空隊によつて急速に防備は強化され、アメリカの新しい要塞となつたハワイ、　このハワイを攻撃することは果して可能だらうか不可能だらうか。

その防衛はアメリカ領土中今までかつて見たことのないほど優秀なものである。

戰鬪機と爆擊機、操縱士、偵察士、機關銃射手はじめ米軍の熟練技術家多數は、ハワイへ、ハワイへと續々送られてゐる。米太平洋岸を距ること二千マイル、ハワイは事實上防備された不落の陣營だ。

二千五百萬ドルの巨費を投じて建造された世界最大の陸軍飛行場といはれるヒツカムの新飛行場には米陸軍航空隊のハワイ島駐屯部隊卽ちハワイ航空隊の最上級の爆擊機が勢揃ひしてゐる。既に以前から有名なヒツカム飛行場には、カーチスP——三六型追擊機や、ノース・アメリカン〇—四七A型等の第一線機が陣列を張つて居るのだ。

ハワイ空軍司令官フレデリック・マーチン少將は、「敵軍がハワイを攻擊することは不可能だ、」と斷言してゐる、ハワイである。しかも、東亞における戰爭の危機增大とともに、ワシントンの軍部最高首腦部は、太平洋に決定的危險の存在することを確認して、アメリカ軍の威力を最大限まで發揮してゐるのだ。そして、空の要塞ホーイングB——一七型爆擊機が直ちに送

られることゝなつたし、その直後B——一七D型二十一臺も飛んで來た。これ等の飛行機の目的は、特にその任務とする長距離爆撃であることは云ふでもない。そして此等は、疑ひもなく世界の爆撃機中最優秀のものである。全幅百八フイート、重量二十七トン、千二百五十馬力發動機四基を備へて、時速は三百マイルを超え、航續距離は三千マイルをらくに突破する。

この爆撃機隊を輔佐するために、多數の追撃機とか、ヒツカム、ホイーラー兩飛行場に駐屯するためにやつて來た。この一群の中には、多分、カーチスP四〇型追撃機、ロックヒード三八型邀撃機、ベル・エアラコブラ、ダグラスA二〇A型攻撃機等が含まれてゐる筈だ。

しかも、終始能率的な陸軍は、地上整備人員の配備を怠つてはゐない。整備のために必要なあらゆる部門に、立派な學校も設けてある。かつて陸軍は、餘りに技術的部門の擴充を急速にやつたために、精密機械類や新裝備の續々ハワイに到着するものを手入れする人手の不足に直面した。この問題を解決する唯一の道として、學校を設けたのである。

ハワイの氣候は可也暑いにも拘らず、全員大童で働いてゐる。この島に初めて上陸した新兵

達は、米本土の涼しい氣候の下で聞くのと同じやうなキビ〳〵した軍曹の號令に接するのだ。航空隊では操縦術を習得しようとする人達を奬勵する。ハワイの軍關係學校の教官達は、衒學的な高踏主義的ではなくて、何れも正規將校や專門家連である。若い兵士達は航空寫眞、無電發動機技術、プロペラ、鎔接、流體力學、射撃、火器技術、偵察、航空地圖作製等々十數ヶ部門を學んでゐる。

人員はかくして急速に增加した。陸軍がハワイ防備擴充を着々とやつてゐる今一つの現はれは、ハワイ獨立空軍の創設である。

この獨立空軍は、ハワイ駐屯の全軍航空隊の統率を少將の司令官の手中に收めることにしたものだ。かくしてハワイの防備計畫は、急速に進展した。

一度、新しいカーチスP三六C型追撃機の大編隊が、ホノルル市の上空を非常な低空飛行でさッと飛び去り、あたかも忽然と現はれたかのやうな印象を與へて市民を驚かした。そして眞珠灣の水面からは、毎日の日課である哨戒飛行艇が飛び上つてゆく。PBY哨戒爆撃艇は、ハ

ワイ水域のはるか彼方へ飛び出して絶えず哨戒を行ひ、ハワイに對して攻撃可能圏内に入らうと企てるいかなる敵をも發見せずには置かないのである。

フォード島の海軍航空隊基地は、眞珠灣の中心に位して、格納庫や滑走路や斜道や、倉庫、造兵廠その他の建物や、あらゆる機種の飛行機で充滿してゐる。必要なものは直ちに入手出來、一瞬時の通報ですべてが活動出來る。――こんなハワイを果して攻撃し得るであらうか。

しかも、ハワイ市民までが、こころからの慰さめは、陸海軍當局に對する絶對の信頼である。南方に向つても、西方に向つても、島は嚴重に要塞化されつゝあり、そのために毎日あらゆる種類の船舶が、人員や彈藥や、その他の軍需品を滿載して、ハワイに到着する。ハワイ市民は從つて、何等恐るべきことなしと信じてゐるのである。

ハワイは既に太平洋のジブラルタルだ！　世界中での最强武裝地域だ！　このハワイを攻めるなんてことは白日夢にすぎない。

そのハワイに向つて、わが海の若鷲は、勇敢にも攻撃しつゝあつた。

滿天黑雲が舞ひ下つて、前途は暗澹だ。オアフ島は依然として見えない。何せ長航〇〇マイルの航海の後であり、しかも惡天候であり、もし母艦の艦位に誤差があれば、全員はオアフ島に到着出來ないのだ。羅針儀を頼りにピシッと針を据えてゐるが、氣流が惡いので、時々大きくあふられる。指揮官〇〇中佐は、

（オアフ島に到着出來ないのではなからうか）

ふとそんな不安が掠めて行つた。

四、物凄い艦側の水柱

可也雲の中に深く入つた。多數の編隊だつたので、非常に心强かつた。飛んでゐるときは演習と變りはないやうにおもはれたが、隣りの機が抱いてゐる爆彈が見えるので、やはり普通とはちがふのだなとおもつた。

陽が上つたのか、空一面が明るんできた。

普通この邊の海上では、三十哩、多いときは五十哩の遠望が利くものだが、今は漠々たる密雲に遮られて見通しがきかなかつた。ハワイは千メートルの山を背負つてゐるから、少くとも到着の二十分前から見える筈である。

誰もかも日輪を仰ぎ見た。機上で迎えた壯嚴な日の出だ。全機の搭乘者は頭をあげて、世界史に一線を劃する燦然たる大日輪を仰いでゐる。ゾク〳〵するやうな感激がわきおこる。

某機の後席で、偵察員が〝曉に祈る〟の變へ唄だが、

あゝ堂々の大編隊——

とのんびりと唄つてゐるのが傳聲管から操縱者の耳に聞えてきた。奴！ 死ぬ前になつたら呑氣になりやがつたな、と某は獨りごとを云ひながら——さういへば出發前に、お前の生命はこんど俺にくれといつたら、もう前からやつてあるぢやないかと應酬してきた。——そんなことを思ひ出してゐると、時々太陽が編隊の機から、チカ〳〵と反射してくるのが眼に痛かつ

た。

と、望遠鏡に瞳を凝らしてゐる指揮官の瞳のうちに、さつと明らかに海岸線が現はれた。密雲の中にぽつかりと口をあいた眞珠灣の海岸線だ。そこだけ今微かに雲が切れて晴れてゐる。岸邊に波が、白く碎けてゐる、何のことはない。もうオアフ島の眞上に來てゐたのだ。

丁度オアフ島の上だけ、雲が切れてゐた。折柄の朝日に映えて、綠の島が目の覺めるやうに美しい。

「これぞ、天祐神助！」

思はず上體を乘り出して見下すと、向ふに爆擊地點が見えて來た。手前は街になつてゐる。しかも、見下す下には居る〳〵〳〵。敵の飛行場だ。敵機が悠々と翼を休めてゐるではないか。

「今だ、全員突擊の時は今だ」

編隊は大きく轉回、雷擊隊は、爆擊隊に別れて南の方へ廻り込んで行く。

ある機の搭乘者は、傳聲管で、

「下のヤンキー連中、今頃は電話を掛けたりして、さぞあはてゝゐるだらうな」

「今からぢや間に合はんと敎へてやりたい位だ」

と、二人は笑ひながら、指揮官機からの合圖を待つてゐた。——

雷擊隊はぐん〳〵高度を下げて、バーバース飛行場の上をかすめた。飛行場には敵機がずらりと竝んでゐる。思ひきりかき廻してやりたいが、殘念ながら任務が違ふ。これは他の爆擊隊が間もなくやつつける筈だ。

つゞいてヒッカム飛行場の上に出た。空の要塞と自慢するアメリカの重爆が、二三十機整然として竝んでゐた。中型機もまじつてゐる。飛行場には人影が一人も見えない。奴さん達、朝飯の時間らしい。整備した兵舍の群、山頂に這ひ上る自動車道路ののた打つやうな白線、海岸にズラリと竝んだ重油タンクは眞白に塗られて、絶好の攻擊目極だ。やつつけたいが、しかし、たゞ一本しか持たぬ魚雷を命中させるべき任務はまだだ。殘念だがそのまゝに、格納庫を

すれ〳〵に交す。入れ違ひに味方の急降下爆擊隊が、猛然こつちへ飛びこんで來るのが見えた。

「しつかりやれよッ」

無言の聲援を送つて、いよ〳〵任務の眞珠灣内にと向つた。

こつちへ入つて來た爆擊隊は、隊長機に續いていづれも思ひ切つた急降下をすると、次第に格納庫の屋根が、昭準眼鏡一杯に入つてきた。こゝだと思つて必中彈を投下した。

呆氣ない感じの爆彈投下だ。敵からの反擊さへない。——敵は既に起きてゐて、朝の體操をやつたり、バスケットボールをやつたりしてゐるのが、遠くに見えてゐた。しかも、我が攻擊を味方の訓練と間違へたのか、なか〳〵體操やバスケットボールを止めやうとしなかつた。

飛行場から物凄い煙りが上つた。この飛行場には人影らしいものは全然見當らなかつた。たゞ自動車が兵舍から格納庫の方へ來たが、上空では全く手持無沙汰なわが〇〇機群が、地上すれ〳〵に降りて行つて銃擊、こいつは簡單にやつつけてしまつた。

某機は、命中彈を浴びせてから機を起し、上昇しながら今の戰果は如何と後横を向つて地上を見すと、格納庫が勢よく空中にふつ飛んでゐた。

飛行場を過ぎるとすぐ眞珠灣内だ。雷擊機隊は、目を拭つてよく見れば、連なる港内の岸近く二隻づゝ横に行儀よく並んでゐるのは、正しく敵太平洋艦の全主力艦ではないか。灣内は朝霞の中にまだ眠つて、拭つたやうな穩かさだ。主力艦は足許に見えてくる。どの艦からも一本の煙すら立ち昇つてゐなかつた。向ふは餘程油斷をしてゐたらしく、軍艦の甲板上に眞白な天幕が張つてあつたが、園遊會でもやつてゐたのだらう。

この棧橋のあたりに、米兵がうろうろしてゐるのがよく見えてゐた。丁度、ハワイで謝肉祭があつて、その祭に上陸してゐたのが恰度歸艦したものらしい。

「今に見ろ」

決然、攻擊姿勢に移つた。やゝ東方に變針し、雷擊機隊は亂雲を截つて、さッと戰艦列に對して一直線に突込んでゆく。まるで天から投げられた一本の鎖のやうだつた。〇〇中尉は命じ

られたとほり小隊を引連れて、風下側に向つて驀進した。眞珠灣は淺くて狹いので、編隊の雷擊は極めて困難だ。〇〇中尉は直ちに列を解いて、單獨發射の命令を下した。雷擊機隊は單機になつて飛び込んで行く。先づ〇〇中尉の機が、最初に發射すべき一番機だ。

——ぐつと高度を落した。主力艦の胴腹から〇〇百メートルくらゐの高さで、〇〇中尉は顎の下に結びつけた傳聲管にしつかり口を當てた。眼下の巨艦に照準をつけると、後の座席に向つて、

「用意ッ」

「打てッ」

瞬間、飛行機がふはりと浮き上つた。魚雷を落したのだ。敵主力へ決戰の第一彈は放たれたのだ。機首を立て直すと、マストとスレ〳〵に急旋回しながらぐんと上昇した。

水深僅か十四五メートルのこの眞珠灣だ。落した魚雷が水底に突きさゝつて、走らぬのではないかと、それのみが心配だつた。投下するときの機の高度によつて、それはきまるのだから

愼重に操縱したのだが、

「魚雷どうしとるかッ」

思はず傳聲管に叫ぶ。

「走つとります。走つとります」

偵察員〇〇兵曹のはずんだ聲。ようしッ、と、さつと垂直旋回しながらちらりと下を見下ろした。ッッッッ！白線を蹴立てゝ海面を走る二條の雷跡が突進して行く。瞬間、舷側からマストの二倍もあるやうな物凄い大水柱が二本、上空に向けて飛び上つた。續いてあとから〳〵と立騰つてゆく。

「やつた！　命中だ」

戰ひとは思へない見惚れるやうな美しい一瞬の情景だ。

「魚雷成功、魚雷成功、二番機のも共に當りましたッ」

傳聲管から、〇〇兵曹のどら聲が上つた。

この間僅に三、四分、まだ敵の對空砲火は一發も火を吹かず、一機の戰鬪機の挑戰さへない。奇襲が鮮かに成功した。一方、急降下爆擊機が灣岸の飛行場に突込んで行つたとおもふと、ハタ〳〵と身を震はせて、敵の第一線機が燃上つた。海に陸に雷擊機と急降下爆擊機が、思ふ存分第一擊を加へ機首を立て直してゐるころ、漸く敵の高角砲彈は、わが機の周圍に炸裂しはじめた。

〇〇中尉も、もう一度上を廻つて成れの果を見てやらうと、操縱桿をぐッと引いた途端、敵の高角砲彈が飛んで來て機の周圍に炸裂した。

續いて小癪にも、驅逐艦、巡洋艦から盛んに打つて來た。

「いけねえ〳〵」

と、獨り言を言ひながらぐん〳〵高度を上げた。上げて行く途中に、味方の急降下爆擊機隊、大型爆擊機隊が、物凄い彈幕の中を悠々旋回しながら、所定の爆擊の巡番を待つてゐる。敵高角砲の射擊は、やうやく猛烈になつて來たやうだ。

機の周圍は、石礫でも投げつけるやうに砲彈が炸裂した。翼に彈丸の當る音がキンキンといつてゐる。——中尉はなほも高度を上げた。もうよからうと、大きく何回も〳〵旋回しながら、二番機と三番機の來るのを待つた。

五、主力艦に命中轟沈撃沈

さア今度は愈々大型爆彈のお見舞ひだ。——指揮官〇〇中佐は、雷撃隊が襲つた後で急降下爆撃機をひきゐ、隊列の最先頭に立つて眼下の巨艦に狙ひをつけた。この一發、全國民の魂が籠つたこの一發だ。

氣流がとても惡く水平爆撃の照準がきまらない。一回、二回、三回、苛々しながら〇〇指揮官は、僚機とゝもに彈幕のなかに旋回また旋回した。と、照準器いつぱいに敵艦の砲塔が大きく飛びこんだ。

「よしッ、投下！」

その瞬間、ガーンと機體に物凄いショッを感じるのと、爆煙の中に五百メートルも火柱が突立つたのが一緒だつた。物凄い黑煙に全艦列が包まれて何も見えない。海中に夥しい重油が溢れ出て、どん〳〵擴がつて行くのが見える。敵戰艦の火藥庫爆發に相違ない。

その頃、既に、

〝われら奇襲に成功せり〟

母艦に感激の第一報が着電してゐた。

敵戰艦の火藥庫の爆發——これこそ空の決死隊と共に潜入した「特別潜航艇」による「特別攻撃隊」の決死の水中攻撃に敵戰艦の火藥庫が爆發したのである。如何に不沈を誇る戰艦といへども、空から雷撃隊、急降下爆撃隊、戰鬪機隊、爆撃隊、それに水中からこの特殊潜航艇と集中攻撃を浴せられては沈まぬ道理がない。

既に艦體の下半分は水底にけしとんで、海面にはブクブクと黑い重油が吹き出してゐる。や

がて残つた上半分も、濛々と黒煙を吹き上げ海中にのけぞつた、これが對日進攻を豪語したアメリカ戰艦の慘めな最期か。

――氣がつくと、わが編隊の周圍には石礫でも叩きつけるやうに敵砲彈が炸裂し、指揮官機の左胴體にも、一發喰つて風穴が開いてゐた。後部をふりかへると、五番がタンクを射ち拔かれたのか、霧のやうに白いガソリンの尾を曳いてゐる。

それでも編隊に離れじとぴつたりとくつついてくる。爆擊の任務を終れば、悠々と自爆する肚らしい。擊たずばやまじとする海鷲の烈しい氣魄がひし〳〵と感じられる。

「狀況を知らせよ」

と、指揮官が信號を送ると、

「補助タンクのみ」

と平然たる答があつた。あゝつひに自爆か。

ついで島の中央にある第二の目標ホイラー飛行場に機首を向けると、こゝにも既に〇〇機以

上のわが戰鬪機と爆擊機が、飛行場の空を蔽つて、果敢な低空攻擊を加へてゐた。

飛行場に引き出されてゐた敵機は、バッバッとつぎ〳〵に火を噴き、格納庫から吹き出す眞黑い噴煙は、わが機影を包んで凄烈かぎりない。敵機はわが電擊に舞ひ上るひまもなく縮み上つてすでに全滅した。今更手を加へる必要もないのだ。わが機は悠くりと落着いてもう一度、敵主力艦の頭上に引返した。

そして二隻づゝ竝んでゐるのを一機が、片方を狙へば、他の一機は殘りの片方を襲つた。

まづ一番機が一彈を見舞ふと、忽ち百メートルも水柱が立ちのぼつた。後續機がそのまゝ突つ込めば衝擊で被害をうけるので、水柱が消えるまで待たねばならない。しかも、彼らは、高角砲の彈幕を恐れる色もなく、爆擊の順序を待つてはつぎ〳〵に巨彈を浴びせた。

雷擊隊の攻擊はさらに猛烈につゞけられ、飛鳥のやうに海面スレ〳〵に敵艦まで近づいては、魚雷をブッ放し、中には機首を立て直すところを敵彈が命中して見る〳〵火を噴くものがある。しかも、火達磨になりながら、最後の一發までも、凄烈な魚雷發射はつゞけられた。そ

して、今はこれまでと、敵艦目がけて眞すぐに突つ込み、火花とともに自爆するわが機もあつた。——世界戰史にかくも悲壯壯烈な光景があつたであらうか。

その頃、敵は慌てゝ、

「空襲、空襲」

と、ラヂオで放送を始めた。その時、「訓練に非ず」「訓練に非ず」「空襲」「空襲」と附け加へてゐた。皆何時もの訓練ぐらひに思つてゐたからであらう。

〇〇中尉機の方にも、敵の曳光彈がよく飛來した。

「まだ來やがるかッ」

中尉の機は、眞珠灣の上を眞横に突つ切つて海上に出た。二番機がいつの間にか後についてゐた。

「よく分りませんが、あのとき三番機は打たなかつたやうです」

いやな豫感が急に中尉の胸にこみ上げてくる。もう少し待たう、中尉はもとの地點に引き返した。

「三番機よ、お前は何處へ行つたのだ」

中尉は眞珠灣上空を何回も〳〵旋回した。しかし、三番機は見えない。歸りは集合しなくとも單獨で歸つて差支へないと云つておいたから、或は先に歸つたかも知れないとおもふ。附近には、もう味方の飛行機も見えない。しかも、もう少し待たう。——やがて、

「歸らう」

誰に云ふともなく呟くと、先に歸つてゐるかも知れぬといふ淡い希望と、後髪を引かれる思ひとを抱いて、中尉機は母艦のゐる位置へと歸りの針路を取つた。

——三番機よ、どうか無事でゐてくれ。

六、〇次空襲部隊

續いて時を移さずハワイ眞珠灣の第〇次空襲だ。わが編隊がヒッカム飛行場の上までくると丁度雲の切れ目で、全く天佑といつてよかつた。丁度ハワイから〇哩位手前のところで、

「第一回空襲成功」

といふ無電を受けた。

やがて目ざすオアフ島が見え出した。すると向ふの空に何か變な塊が見える。時々その塊の中でピカツと光るものが見える。偵察員が

「敵の戰鬪機です」

と、某機中で云つてゐる。近づいて行くとその塊は段々大きくなり、更に近づいて行くと消えてしまふのである。

「變だなァ」

と、思つてゐるうちに、それは敵高角砲の炸裂彈だといふことが分つた。その塊は非常に澤山あつてまるで森のやうな恰好に見えてゐた。近づくに從つて飛行機の周圍に無數に炸裂した。ある機は「もう駄目か！」と思つたが幸ひに一つも當らなかつた。

一隊は格納庫と飛行機を目標にして爆擊針路に入つたが、初め見えてゐた飛行機が、先の編隊の爆擊で吹つ飛んでしまつて、目標がなくなつてしまふのであつた。それでまた別の目標をきめて爆擊しなければならない。

周圍は猛烈極まる高角砲の炸裂だ。部隊長はそんな猛烈な高角砲火の中を悠々と何回もやり直しをしてゐた。

（さすがに豪いなァ）

續く一隊の誰もが、沈着と云はうか、豪膽と云はうか、本當にゑらいと感じてゐた。編隊の中で、高角砲の破片を喰つたものはあつたが命中したものは一つもなかつた。

米國の高角砲のねらひは、不確實は不確實だとしても前方で炸裂し、重慶では後方で炸裂するので、重慶よりは正確だと云はれてゐたが、事實は大抵後方で爆發した。高度の判定がアメリカ側には殆どついてゐなかつた。第〇次空襲隊がフォード島を發見した時は、敵の攻擊は全然なかつた。高角砲火が機の近くで炸裂する頃には、既に編隊の爆擊は終つてゐた。

戰艦ユタが沈んでゐるのが見えてゐた。

ヒツカム飛行場は物凄い煙だつた。驅逐艦が全速力で逃げ廻つてゐる。白波を蹴立てゝ縱橫無盡に逃げまはつてゐるのが、なかなか壯觀だつた。

前から三番目の主力艦は、カリフオルニヤ型といふことだけは分つてゐた。列機は共同機の進路に從ひ行動しなければならない。まづ保針が大切であるが、爆擊針路に入る前には目標をきめてゐるので、前から三番目、つまりカリフオルニヤ型といふことは分つてゐた。——氣流はとても惡かつたが、爆擊の功果を擧げることに夢中だつた。

或列機の最初の目標は戰艦二隻であつた。實戰も訓練と少しも變りはないとはいへ、たゞ氣

慨だけは普段と違つてゐた。行つて見ると、一隻は驅逐艦で獲物が小さいので、遣り直して二回目の爆擊にかゝつた。二回目の時には高角砲がやつて來た。

やり直しをやると、被害はどうしても大きくなる筈だが、この時はさうではなかつた。ハワイの高角砲陣地は相當なものだつた。海兵團とか燃料タンクとか飛行場の周圍到る所に高角砲陣があつた。それが一齊に火を噴いて來るので相當なものだつた。——爆擊は實際日頃の訓練と餘り變りはなかつた。空中戰もなかつたから、若し猛烈な地上砲火さへ炸裂しなかつたら、普段の訓練と同じで、精神的な感激以外には餘り變りはなかつた。

爆彈が命中した時の氣持は、たゞ妙に泣けて來るといつた氣持であつた。炸裂したものは好く見えたが、但しほんの一瞬の間だつた。——自分の爆彈が何處へ命中したかは、操縱に氣を取られるから、さう正確に見定めることは出來ない。が、編隊の爆擊がどのあたりに命中したかはよく分つた。

〇〇兵曹等は、ヒツカム飛行場爆擊に行つたが、途中で前回の連中の大成功を無電で知り、

勇氣は倍加してゐた。ところがすでに敵の方でも應戰準備が出來てゐるので、ハワイの島が見えたと思つたら、もう對空火砲がどんどん火を噴き出してゐた。そのうちに編隊は、砲彈に廻りを取圍まれてしまつた。いよ〳〵その雨の中をくゞりながら、目標の格納庫へ狙ひを定めるのであるが、驚いたことには、前回の爆擊機の連中が殆どやつつけてしまつてゐる。——それで落下する間際にまたやり直しをした。徹底的にいゝ目標にぶつかりうと、新しいところを探しては一彈必中でやつて來た。

或機は、急降下爆擊を終つて、機銃で地上掃射をやつてゐた。そのとき地上から機銃で打たれた。またこの機の擊ち出す彈と敵の機銃彈が入り亂れて曳痕彈のみがバッ〳〵と交錯した。地上掃射を終つて、決められた針路をかへる時、敵戰鬪機二機がフォード島の基地へ歸還するのを見つけた。敵は機銃で應戰してきたが、こちらは三機だつたので譯なく擊ち落した。

アメリカの戰鬪機の手應へは至つてもろいものだつた。その時はこちらが三機で、向ふは二機だつたし、後からは編隊の友機が澤山飛んでゐたから、敵は恐れをなしたのであらう。すぐ

逃げ始めた。逃げ足はとても早かつた。そいつを後から打ちまくると、すぐ火を吐いて墜落して行つたのである。こちらは負傷一人もなかつたが、歸つてみると一機は二十三發喰つてゐた。これは地上掃射の時の被彈だつた。

部隊によつて違ふが、或部隊では全部被彈してゐた。ヒッカム飛行場で地上掃射したものは全機被彈してゐた。高角砲を受けると腰が浮く感じがした。腰が浮くとやられたかなと誰もが思ふ。或機でどこかの電線を引つ掛けたまゝ母艦まで持歸つたのもあつた。

〇〇機は、魚雷發射前、すでに機關内に發火し、つまり飛行機に火災を起してゐたが、射程距離まで行き、完全に魚雷任務を果し、それから更に引き返して、前に云つたごとくヒッカム飛行場の格納庫に自爆した。もう一つは矢張り魚雷を發射する前に火災を起したが、完全に目的を遂げると、相手の艦橋に壯絶な自爆をした。この相手はオクラホマだつた。——急降下中、火達磨になつて艦に自爆して行くのを目擊したものもあつた。

あゝ出發の時、生還を期したものが一機でもあつたらうか。これを見た友機は、

「僚機よ！」

と、思はず叫んだ。そして自爆した僚機が飛び還つて來るやうにと心に念じた。それで歸りの足はとても重かつた。

「大東亞戰爭の起ち上りの一戰に、眞珠灣頭に散華した忠烈な僚機よ、永へにわが海軍を護り給へ！」

若鷲の双眸にはきらりと露がひかつてゐた。

七、歸らない荒鷲

第一次空襲部隊はいま歸航の途にあつた。

「母艦右四十度〇萬メートル、左へ進んでゐます」

〇時間飛んだのであらうか。偵察員の報せである。操縱桿を握る片手に〇〇中尉が望遠鏡を

取つて見ると、編隊を勵ますかのやうに、軍艦旗を大洋の風に千切れるやうにはためかしながら、母艦が悠容たる姿を浮べてゐた。

母艦は荒濤に乘つて、前後左右にとてもひどい動搖だ。著艦するのは離艦する時よりも一層むづかしい。各機にはそれ〴〵部下が二人位乘つてゐる。こゝまで來て部下を殺してなるものかと、各機の操縱者は、操縱桿を固く握つて愈々愼重に操縱した。脚が折れて飛んだかと思はれるやうな衝擊を受けたと思ふと、飛行機は甲板に着いてゐた。皆夢中だつた。

普通なら故障の起るのが當然だつたが、皆一生懸命だつたので、故障を起したものは一機もなかつた。歸る時も小雨模樣で、雲は低く垂れてゐたので、指揮官の苦勞は大變なものだつた。列機は指揮官機の後に從へばいゝから針路の心配はない。が、密雲を縫つてゆく指揮官の苦勞は、本當に竝大抵ではなかつたのである。

そんな天氣だつたのに拘らず、出發の時も、歸還の時も、豫定の時間と地點に豫定通り集つて來たのは全く天佑だと云つてよかつた。

一同の身體中からベットリと汗が流れてゐる。冷汗と暑い汗と一緒だ。著艦すると、士官や整備員にぐるりと飛行機の周りを取り圍まれ、整備員など抱きついて來た者もあつた。

「御苦勞、御苦勞」

「異狀はありませんでしたか」

眞劍なその顏、みんな眼頭を熱くした。整備員はすぐまた機體に駈け寄つて行つた。仲々空襲の模樣など聞かない。

「やつて來ました。有難うございました」

としかみなも云はない。

歸艦しても休養などする暇はなかつた。敵の反擊に備へなければならないし、すつかり戰鬪體制に入つて非常に忙しくなつた。愛機の被害狀況を調べたり、今までより以上、哨戒を嚴重にしなければならなかつた。

——三番機の整備員だけが、ぽかんとして、眼を皿のやうにして立つてゐる。まだ歸らないのだ。

「三番機は歸つたか」

「まだ歸りません」

〇〇中尉に不吉な豫感がまた襲つた。先に歸つて惡かつたと思つた。中尉はそのまゝ艦橋に駈け上つた。双眼鏡を眼から離さず、三分、五分と立ちつくした。しかし、レンズに入るものは明るい南國の空に浮ぶ羊雲ばかりだ。早速攻擊の狀況を、指揮官まで報告しなければならないのだが、中尉はそれを忘れてただまつて空を見てゐた。

艦長も、司令官も、一向に報告を聞かうとはせず、指揮所に上つて望遠鏡をとり、

「あと〇機、まだか」

と、歸還機の數を數へてゐられる。時は容赦なく過ぎて行つた。十二三分たつたころである。レンズの中にぽつんと一つ芥子か胡麻粒のやうなものが入つてきた。ぐん〳〵大きくなる。母艦目蒐けて一直線だ。味方だ。胴腹の番號が讀めてきた。三番機だ。着艦した機に中尉

は飛んで行つた。
「お前、どうした」
興奮して叫んだ。
「どうも風が強くて工合が悪かつたので、二回やり直したために遅れてしまひました。しかしうまく當りました」
「別段怪我はないか」
「飛行機は大分彈丸を受けとりますが、人間は何ともありません」
機長の〇〇兵曹はさう云つてけろりとした。
一本きりの魚雷を命中させるのに。機の姿勢、高度、速力が不適だつたので、敵の高角砲に晒されながら、一旦突込んだやつをまた上昇して、再び二回まで直角に突込むことを繰返して魚雷を命中させて來たのである。中尉は整備員と一緒にこの機體を點檢すると、十八發の彈痕があつた。

まだ〇機歸らない。艦橋にも指揮所にも、乘員が鈴なりになつて眼鏡で覗いてゐる。艦長も依然として眼鏡を當てゝ立盡してゐる。漸く四十分經つた頃、
「三機歸つて來たぞ」
と、誰かゞ怒鳴つた。皆の眼鏡は一齊にその方へ向いた。着艦した三機の周圍に皆な駈け集つて、報告を聞いて見ると、
「攻擊後敵が一機も反擊して來ませんから、張合ひ拔けがして少しあつちこつちハワイを空から見物して來ました」
「初めての洋行だからな」
指揮官が後を受けついで云ふと皆どつと會心の笑聲を擧げた。
しかし、殘りの〇機はつひに歸らなかつた。指揮官が進み出て黑板に、敵の狀態、味方の戰鬪狀況、味方の損害を詳しく圖解して報告すると、艦長は、
「御苦勞でした」

と、一言、滿足さうに顏を綻ばした。入れ代つて別記第二次攻擊隊が出發した。再び闘戰配置についた。晝飯は歸艦してから充分時間の間にあつた。

第二次攻擊隊も、素晴しい成果の土產を積んで歸つて來た。しかし、その中には急降下爆擊の際愛機がぐらつと搖れたので、ハッと振り返ると、尾翼に敵高射砲彈のために大穴をあけられ、そのまゝヒッカム飛行場の敵機に銃擊を浴びせかけるうち、二度目に右肘を機銃で擊ち拔かれたのがあつた。手がまつたく利かない。しかし、死んでもやるのだ、と、無我無中で、操縱者に銃擊を繼續するやう命じ、左手でなほ數回銃擊をつゞけ全彈を擊ちつくした。

（もうこれで思ひ殘すことはない！）

ホッとした氣持になると、氣が遠くなるやうだつた。だが機長としての責任が殘されてゐる。歸艦するまでは死ねないと、氣をはりながら飛行を續けた。ともすれば意識力がどんよりして來る。間もなく着艦したが、はりつめた氣が一時に弛んだか、機上で失神してゐた。

お土產は、敵艦隊や飛行機の潰滅振りを寫眞に納めて歸つて來た者だ。

「敵機が來んので撮つて來たんだよ」

早速現像して皆で取圍んだ。

「こいつは俺がやつつけたんだ」

「このヒッカム飛行場は自分達の隊だ」

それは素晴しい寫眞だ。周圍にドス黑く重油を浮せて艦隊の大半は沈沒してしまつてゐるオクラホマ型、ペンシルヴァニヤ型の舷側高く魚雷命中の水柱が物凄く上つてゐる。どの寫眞も米國太平洋艦隊全滅の斷末魔だ。

「しかし、ハワイに行つたのは始めてだつたが、研究してゐたハワイと殆んど同じだつたね。たゞ、記念塔の位置が少し違つてゐたね」

「さうだね。記念塔の位置が一寸、違つてゐた——しかし、此の寫眞は、素晴しい寫眞だぞ」

「凄い寫眞だな」

こう云つて話合つてゐる若鷲達は無邪氣なものだつた。そして司令官が「無事任務を果して

來るのを何時までも艦上で待つてゐる」と云はれた言葉を思ひ出しては泣けてくる若鷲達だつた。ほんとに泣けて泣けて仕方がなかつた。

第三　特別攻撃隊の偉勳

一、九勇士の面影

ハワイ海戰において特記すべきは特別潛航艇をもつて、眞珠灣を急襲した特別攻撃隊の偉勳である。

一旦緩急あらば、これをもつて報國の本分を盡さんとし、數ヶ月に亘つて案を練つた岩佐中佐以下の數名の將校の着想、平素より固く心服せる上官と生死を俱にせんことを念願し、淡々たる心境をもつて參加したる隊員、部内内にも機密を保持しつゝ不眠不休晝夜兼行で、心血を注いで「特別潛航艇」の完成を急いた技術工作者の熱誠等、これらは特に懦夫をも起たしむるに

足るものがある。

特別攻撃隊が勇躍征途につかんとする昭和十六年暮、岩佐直治中佐は〇〇大佐に次の如き一文を草してゐた。

（前文省略）　一意奉公の決意をいよ〳〵強固にし大任貫徹の目的に邁進せるも生來の鈍器鈍腦を發揮し獻身的御指導御鞭撻とを賜りつゝも御期待に副ふ何事をもなし得ず、今日に及べるを衷心御詫を申上候。

惟ふに時局は益々急迫し帝國存亡の秋に至り帝國はいよ〳〵日本の存續のためつひに最後の一石を投ずるの止むなきに至りし時たま〳〵時局打開の第一石を投ずるの任を受く小官の榮譽これに過ぐるなし、誓つて大任を達せん、今ぞ身を以て御指導に報ぜん、若し大任を果し得ざることあらんも、それは小官の足らざる所（中略）ここに生前の御指導に對し奉感謝候武運長久の程祈念奉候

岩佐拜

〇〇大佐殿

また、中佐は、故郷の兩親に對して、切々の心情を述べ送つた。

（前略）　選ばれて單身敵港灣に突入以て直擊一擧に敵意圖を打破し大和正義を認識せしめ民族の福祉と世界平和招來の大任を帶ぶ（中略）然れども再會を期し難く願はくは此の世に生を承けてより廿有七星霜、暑きにつけ寒きにつけ御心の程をなやまし子としての務未だ果し得ざりしを御許し被下度此行果し得ば後果つるとも御讃め被下度又行半ばにして果つるとも直治の魂の赴く所を得さしめられ度

父上様

母上様

身はたとへ異境の海にはつるとも

護らでやまじ大和皇國を

直治

次に海軍少佐横山正治も、「誓神明期必勝」といふ揮毫を終るや、次の遺書を認めた。

「（前略）　皇國非常の秋に際し死處を得たる小生の榮譽之に過ぎたるは無し謹みて天皇陛下の萬歳を奉唱し奉る。貳拾有參年の間亡父母上様始め家族一同様の御恩小學校中學校の諸先生竝海軍に於て御指導を賜りたる教官上官先輩の御高恩に對し衷心より御禮申上げ候、同乘の上田兵曹の遺族に對しては氣の毒に堪へず、最後に皇恩の萬分の一にも酬ゆる事なく、死する身を深く愧づるものに有之候

横山正治

同中佐は、生死を超越した心境のうちに部下の遺族を思つた。

海軍少佐古野繁實も、故郷の父へ宛てゝ左の歌と句を遺して居る。

君のため何か惜まん若櫻
散つて甲斐ある命なりせば

いさ行かむ綱も機雷も乘り越えて
撃ちて眞珠の玉と砕けむ

靖國に會ふ嬉しさや今朝の空

と、和歌と句に七生報國の赤心を託したその心事は、床しくも崇高な帝國海軍魂の精粹であつた。

次に海軍大尉廣尾彰は、公務上の記錄、意見を書き遺したほか、遺書らしきものは何一つ殘さなかつた。大尉は、萬一にも生還を期し難い死の大任を前に、〇〇月下旬歸省した際、肉親の母にすら大事を秘めて、心密かに家族と最後の訣別を遂げて來たが、孝心深い大尉はその日の日誌に次のやうに綴つてゐる。

廣尾大尉の日誌の一節「親も兄弟も、友人も知人も、己が死を賭しての仕事に從事してゐるとは知らぬ筈である。何時もの休暇と思ひ込んで別れてきた。皆様御免御許し下さい。是唯

國家のため帝國發展のため、小我を捨てゝ大我に生きるのであります。何時かは知つてもらへる時があるでせう。その時はあゝ彰は矢張りやつてをつたわいと云つて下さい」

出發直前、大尉は戰友に向つて、笑ひながら、

「自分はピストルと日本刀を持つて行く。襲撃が終つたらホノルルへ一寸上陸して、こいつでひと暴れあばれてやりたいよ。お辨當持つたり、サイダーを持つたり、まるでハイキングだね」

と、最後の日の面影は死地に乘り込む勇士とも思へぬほど坦々たる心境であつた。大尉は海兵時代から日曜には辨當持參で、山野を跋渉するのが何よりの樂しみであつた。そして歩きつゝ獨り詩吟した。また、

「肌着だけは取替へた。軍裝で行きたいが、暑いから搭乘服だ」

と、何氣ない言葉のうちに、生きて還らずとの毅然たる決意をみせてゐた。

「御成功を祈ります。待つて居ります」

「しつかりやつて來ます」

次に特務少尉横山薫範は、出發の直前、無二の親友某兵曹に向つて、

「色々お世話になつた」

と、頭を下げて、搭乘服のポケットから一と握りのラヂオ豆を取出して皆にすゝめた。

「やつてくるぞ、戰艦を」

と、早くも敵戰艦を呑む氣慨を見せて戰友の手を握つた。

「頼んだぞ、戰艦以外は駄目だぞ、驅逐艦では駄目だぞ」

「うん」

「驅逐艦も駄目、潜水艦も駄目々々」

「艇長が必ず目星しい戰艦を狙ふから大丈夫だよ」

ラヂオ豆は彼が首途に當つて貰つたもので、いま最後の別れの宴の役を果してゐるのだつた。

「今度歸つたら大いに呑まう」

と云つたのに對して、横山特務少尉は遂に、呑まうといふ約束をしなかつた。

次に特務少尉佐々木直吉は、重要命令の傳達があり、續いて行動の大要と注意が達せられたあとで、佐々木特務少尉は、戰友と一緒に甲板で煙草を吸ひながら、

「命令をうけたとき身體が震へるやうな氣がした。大體想像はしてゐたが、あのやうに命令されると初めて覺悟が定まり行動が出來る。目的が明瞭になつたから大いに働くぞ」

と云つた。

次に兵曹長片山義雄は、出動に際して、戰友が、

「發見されたり爆雷攻擊をうけたら終りだな」

と云ふと、

「なァに、さうなつたら全速力でどてッ腹目がけて突込んで大穴をあけてやる」

「敵は驚くだらうな」

「かういふ一句はどうだらう。——明くる日のルーズヴェルトの泣き言を俺も聞いたぞ閻魔の

前で」

と問答して悠々たる心境を示した。

また、兵曹長上田定は、最後まで默々として勉學に努めてゐた。遺品整理中衣嚢箱から「文字くづし方辭典」「處世の道」等が發見された。「文字くづし方辭典」には、字くづしを稽古中の紙片が挿んであつた。

最後に兵曹長稲垣清は、戰友に、

「最後の最後まで奮鬪する。今度あふのは靖國の神社です」

といふ言葉を遺した。

この勇士達は日頃から上官の信任厚く、同僚後輩からは尊敬の的であつた優秀な人物ばかりであつて、いづれも眼中出世なく榮達なく快樂なく我身さへなく全く自己といふ觀念を捨てゝひたすら大君と祖國に全身全靈を捧げ盡したのである。この攻擊は、岩田中佐以下、數名の將校の着想に基くものであつて、自ら工夫をこらし、一朝有事の際はこれをもつて盡忠報國の本

分を盡したいもの」と、人力をもつては至難と思はれるこの大壯擧を案出したのである。爾來數ヶ月といふもの自分達の襲擊に萬に一つも失敗があつてはならぬと、人目を忍んで訓練に訓練を重ね、言語に絶する苦心を續けたのである。

尊く散つた特別攻擊隊、その日の諸勇士の面影については、海軍報道部課長海軍大佐平出英夫氏が、マイクを通じて、言々句々、聽くものすべて感涙誘ふ發表を行ひ、純忠に燃える勇士達の大精神を讃へて次のごとく放送した。その一節を抄記していたゞく。

（前略）アメリカ側の報道などを加味して私の想像によりその攻擊の模樣を申上げようと存じます。特別攻擊隊が枚をふくんで眞珠灣口を潛入せんとしますや防潛網が張られてをり機雷が無數に敷設してあり、さすが敵の警戒は嚴重であります。しかし特別攻擊隊は百錬の勇士揃ひ、沈着機敏な操縱によつて難なくこれを突破します。

このとき「わが事既に成れり」と勇士たちは微笑み合つたことと思はれます。指揮官以下眞に一心同體人も艇もこれまた渾然一體をなしてをります。灣内の複雜な水路もものかは、躍

る心を靜かに押へ、われ遲れじと全艇奥へ奥へと突入いたします。

やがて潛望鏡に映るは、行儀よく二列に竝んだ敵主力艦の集團ではありませんか。勇士達の滿足が思ひ遣られます。各艇攻擊を開始致します。ある艇は艦列の中央に位する巨艦目がけて接近、猛然第一擊を加へ、またある艇はその隣の胴腹をえぐります。

このとき潛望鏡にチラッと見えるのは空からする友軍機の活躍です。友軍機は、いま果敢な爆擊の眞最中らしい、勇士達の勇氣は、いよ〳〵百倍、一艦といへども擊ちもらしてはならじと、齒を食ひしばつて頑張ります。

さらに次の攻擊に移らんとする時であります。敵の驅逐艦一隻、潛望鏡を發見したものか横合から衝突にやつて參ります。そこで手ごたへを確認する暇もなく、水中深く潛沒して難を避けた艇もあります。

このころ敵の砲彈は雨となり、空からする航空部際の攻擊はいよ〳〵猛烈を極め、魚雷走り、爆彈飛び、灣内は忽ち大混亂に陷りました。從ひまして水中よりする各艇の强襲による

戰果も絶大であつたと思はれるのでありますが、航空部隊の戰果と判別することは困難な狀況だつたのであります。

晝間の猛烈な戰鬪を海底に潛んで聞きながら、逸る心を押へて日沒を待つた特別攻擊隊の一艇は、艇内に持參した組木細工の玩具など相手に時間を消してゐたことゝ思ひます。これは誠に容易に出來ないことであります。

遂に夜に入り月の出を待つて强襲を敢行致します。我が一艇は晝間攻擊による損傷の少い敵主力艦は無いかと探し索めて肉薄接近して行きます。見れば敵艦の巨體は月光を浴びて、くつきりと影繪となり、攻擊の好目標です。

「發射始め……」

指揮官の號令に、最後の襲擊が決行されます。見敵必殺の精神こめた襲擊に狂ひはありません。轟然たる爆音が灣内をふるはせ數百メートルの火の柱が一時天を焦します。と見るや、白波を蹴つて悠然司令塔が水上に浮かび出ました。沈着大膽な指揮官は、今し巨體眞二つに

裂けて崩れ沈まんとする敵艦の斷末魔を確認したのであります。宿望今ぞ成る、月光仰ぐ年若き强者達の胸中如何ばかりであつたでありませう。

この敵艦轟沈は遠く灣外にありました友軍部隊からもはつきり認められ、大爆發と共に天に冲する火焰が灼熱した鐵片を空中高く吹き上げるのさへ望見されたのであります。時は十二月八日布哇時間に致しまして七日午後九時一分、月の出二分後のことでありました。戰は終りました。しかし、特別攻擊隊の勇士達はつひに歸らなかつたのであります。布哇時間午後十時四十一分に特別攻擊隊の一艇からの「襲擊に成功せり」の無線放送が最後のものとなりました。

隊員眞に生死を超越し、最後まで敵艦擊滅のみに專念し、生還のごときは念頭に無く、あるものは擊沈され、あるものは自爆致したことと認められるのであります。」

還らぬ九勇士の烈々たる盡忠精神は、一億同胞の心を强くうつて熱涙滂沱たるを覺えしめる。わが海軍は昭和十七年三月六日これら勇士の赫々たる勳功に對して、山本聯合司令長官の

感狀とゝもに特に二階級進級の榮をもつて酬いたのである。ここに軍神の面影を謹記して置く。

海軍中佐　岩佐直治

性剛毅果斷、明朗潤達職責完遂には常に捨身にて之に當り、古武士、志士の風格あり、上下の信望を一身に聚めてゐた。今回の壯擧には最先任者として參加良く部下を統率し戰前既に敵を呑むの概があつた。

本籍　群馬縣前橋市川原九番地、大正四年五月六日生。群馬縣立前橋中學校出身、昭和九年四月一日海軍兵學校入校（第六十五期）同十三年三月十六日海軍兵學校卒業海軍少尉候補生、磐手乘組、同十三年六月廿九日熊野乘組、同十一月十五日任海軍少尉同十二月一日鵜乘組、同十四年十一月十五日任海軍中尉、同十一月廿日比叡乘組、同十五年一月廿五日摩耶乘組、同五月卅一日鹿島乘組、同十六年十月十五日任海軍大尉。

〔家庭〕、父直吉（七五）△母てる（六八）△兄竹松（五三）五郎（四〇）の諸氏

海軍少佐　横山正治

極めて明朗にして薩摩の氣風に滿てる淡泊なる性質にして而も信念を以て事に當るの士であつた。人格圓滿で到る處にて持てはやされたるも意に介せず常に高き自己の職務に對して邁進し面目躍如たるものがあつた。

本籍、鹿兒島市下荒田町二一二番地、大正八年十一月十八日生。鹿兒島縣立第二鹿兒島中學校出身、昭和十一年四月一日海軍兵學校入校（第六十七期）同十四年七月廿五日海軍兵學校卒業、海軍少尉候補生、磐手乘組、同十二月廿一日霞ヶ浦海軍航空隊付、同十五年一月廿日五十鈴乘組、同五月一日任海軍少尉、同十月十五日長鯨乘組、同十六年十月十五日任海軍中尉。

〔家庭〕母たか△兄正藏、正利、四郎△姉シヅエ、ミヨ、エタ△弟末造の諸氏。

海軍少佐　古野繁實

兵學校時代既に柔道二段、相撲特級の猛者で剛直果敢なる一面人情味厚く海軍將校として

典型的人物であつた。その年の秋休暇歸省の時「此の次は白木の箱にて歸る」と答へたことは有名な話柄である。

本籍、福岡縣遠賀郡遠賀村大字蟲生津六二一、大正七年五月十日生。福岡縣立東筑中學校出身。昭和十一年四月一日海軍兵學攻入校(第六十七期)、同十四年七月廿五日海軍兵學校卒業海軍少尉候補生八雲乘組、同十五年一月廿日伊勢乘組、同五月一日任海軍少尉、同十一月十五日伊號第五八潛水艦乘組、同十六年十月十五日任海軍中尉。

〔家庭〕 父彦市△母マキ△祖母カツ△兄照男、峻△弟忠男、孝男、和男の諸氏。

海軍大尉　廣尾　彰

頭腦明晰且明朗潤達にして兵學校時代より勉强に熱中せる者を尻目に日曜には辨當を持つて山野を跋涉し得意の詩吟に浩然の氣を養ひ、潛航艇の訓練中も一人夙に起き通船を漕ぎて港内を廻り又武技を好み餘暇あれば銃劍術木銃を振廻してゐた。

本籍、佐賀縣三養基郡旭村大字江島二七六、大正九年一月十四日生。佐賀縣立三養基中學

校中身、昭和十二年四月一日海軍兵學校入校(第六十八期)、同十五年八月七日海軍兵學校卒業、海軍少尉候補生香取乘組、同十月五日那智乘組、十六年三月十五日妙高乘組、同十六年四月一日任海軍少尉。

(家庭) 父練吉△母カツ△兄寛、寛次△弟昭行の諸氏。

海軍特務少尉　佐々木直吉

本籍、島根縣那賀郡上府村二五二、大正二年五月廿日生。昭和七年六月一日吳海兵團入團驅逐艦薄雲、蔦、海軍水雷學校、磯波、海軍潛水學校、海軍水雷學校高等科等を經て。

海軍特務少尉　横山　薫範

本籍、鳥取縣東伯郡古布庄村大字法萬五十五番屋敷、大正六年十一月廿三日生。昭和九年六月一日吳海兵團入團、扶桑、海軍水雷學校海軍潛水學校、伊號第六十八潛水艦、海軍水雷學校高等科教程等を經て。

〔家庭〕 父啓藏△母しな△祖父玉吉△祖母とも△兄鶴美、武夫△姉千惠子の諸氏。

海軍兵曹長　稲垣　清

本籍、三重縣一志郡川合村大字庄村二八八、大正四年十一月廿三日生。昭和九年六月一日吳海兵團入團、驅逐艦早苗、海軍水雷學校、驅逐艦吳竹、海軍水雷學校高等科教程等を經て

〔家庭〕父清吾△母あやを△弟一男、薫、文夫、英雄の諸氏。

海軍兵曹長　上田　定

本籍、廣島縣山縣郡川迫村大字藏迫八三九番ノ三、大正五年十月廿四日生、昭和九年六月一日吳海兵團入團、海軍水雷學校、舞鶴防備隊、海軍潛水學校、伊號第五十五潛水艦伊號第七十潛水艦、海軍水雷學校高等科教程等を經て。

〔家庭〕父市右衛門△母サク△弟武三△妹キミ、ミスエ、信子の諸氏

海軍兵曹長　片山義雄

本籍、岡山縣赤磐郡五城村大字矢知一二八五、大正七年九月十四日生。昭和十一年一月十日吳海兵團入團。神通、吳防備隊、海軍水雷學校、海軍潛水學校等を經て。

〔家庭〕母蝶△兄巳佐夫、卓衛、嵩△弟旭男の諸氏。

二、アメリカの狼狽と混亂

十二月八日早曉、帝國海軍航空部隊並に精鋭なる特別攻撃隊が敢行した果敢なる必殺の劍は、一瞬にして米大艦隊の全主力を屠り去つたことは前記のとほりである。

同海戰においてアメリカが失つた艦艇は、九隻の戰艦を筆頭として各級巡洋艦、驅逐艦その他合計廿隻に達し、航空機また四百六十餘機を撃破した正に豪壯極りなき大戰果であつた。その勝利の記錄は、

(1) 撃沈せる戰艦五隻

カリフオルニヤ型一隻、メリーランド型一隻、アリゾナ型一隻、ユタ型一隻、艦型不詳一隻。

甲巡または乙巡二隻、給油船一隻。

(2) 大破（修理不能または極めて困難なるもの）

戰艦三隻（カリフオルニヤ型一隻、メリーランド型一隻、ネバダ型一隻）、輕巡二隻、驅逐艦二隻

(3) 中破（修理可能と認むるもの）

戰艦一隻（ネバダ型一隻）、乙巡四隻。

(4) 擊破炎上の飛行機

敵陸海軍航空兵力に與へたる損害は銃爆擊により炎上せしめたるもの約四百五十機。擊墜せるもの十四機、右の外擊破せるもの多數。

(5) 格納庫

十六棟炎上、破壞二棟

これに對し我が方の損害は、飛行機廿九機、未だ歸還せざる特殊潛航艇五隻。

特別攻擊隊は少くとも前記の戰艦アリゾナ型一隻を轟沈した外。大なる戰果を擧げ敵艦隊を震駭させたが、その未歸還の五隻の乘員は、ハワイ上空に散機した二十九機の海鷲の魂と共に永く戰史上を飾ることであらう。

かくして防備を誇つた眞珠灣は、今や擊沈されたる戰艦大破した戰艦をはじめ、無數の小艦船の無慘にして亂雜なる屍の地獄圖繪と化したのである。

この急襲はアメリカを失神せしめ、米人をして——上はルーズヴエルト大統領から下は下水掃除夫まで、アツ！ と云はせ狼狽と混亂の底に陷し入れた。「土曜日の驚愕（サターデー・サープライズ）」だとか「日曜日の驚愕（サンデー・サープライズ）」とかいふ新語の發祥國だつたアメリカが、今度は自ら典型的な「日曜日の驚愕（サンデー・サープライズ）」を喰つたのである。

ルーズヴエルトはバリケードを築いてガスマスクの武裝姿も物々しい一箇小隊位の警備兵の居る議會や、機銃群に取圍まれた白堊館などを慌しく行つたり來たり——狼狽ぶりは如實となつて一種滑稽味さへ帶びてゐた。

ハワイ海戰で、敵航空母艦エンタープライス號がハワイ沖で大破するや、艦長は最後の命令として

「搭載機は全部陸上基地に歸還すべし」

と、命令すると、艦上機七十餘機は、正に太平洋の波底に沈まんとする母艦より辛うじて飛立つたが、ハワイの基地では、未明の大空襲の惡夢からまだ覺めきれぬところへ、再び轟音、編隊機が上空に現はれたので、

「さてこそ再度の來襲」

と。漸く準備の整つた地上砲火を米機が低く舞ひ下りたところをねらつて、一齊に浴びせかけた。上空の米飛行機は、無電で、

〝我は味方なり〟

と、發信したが、狼狽の極に達してゐる地上では聞かばこそ、打つて〳〵打ちまくり七十餘機、悉く同士討の高射砲火のため撃墜されたのであつた。

その日、桑港附近にあつた米潛水艦は、一輸送船を發見したが、それをわが艦艇の急襲と早合點して魚雷を放つて撃沈した。沈められた米輸送船の乘組員五六十名は、辛うじてボートに乘り移り、陸地に向つて漕いで歸つたが、海岸の防禦陣では、これを見るや「日本軍の敵前上陸」と靑ざめ、うむをいはせず一齊射撃をあびせ哀れにもボートをして海の藻屑と化せしめた。二度までも、敵味方の見分けもなくなつた自國軍の手にかゝつて最後を遂げた米船員の不運もさりながら、敵の狼狽ぶりこそ世界の笑ひ話ともなつた。

第四　マレー沖海戰の全貌

一、英東洋艦隊の撃滅

無敵海軍の開戰三日目の十二月十日、大本營海軍部は突如左のごとく發表した。

「〔大本營海軍部發表〕（十日午後四時五分）帝國海軍は開戰劈頭より英國東洋艦隊、特にその主力艦二隻の動靜を注視しありたるところ、昨九日午後帝國海軍潛水艦は敵主力艦の出動を發見、時後帝國海軍航空部隊と緊密なる協力の下に捜索中、本十日午前十一時半マレー半島東岸クワンタン沖において再びわが潛水艦これを確認せるをもつて、帝國海軍航空部隊は機を逸せずこれに對し勇猛果敢なる攻撃を加へ、午後二時二十九分戰艦レパルスは瞬間にして

轟沈し、同時に最新式戰艦プリンス・オブ・ウエールスは忽ち左に大傾斜暫時遁走せるもまもなく同二時五十分大爆發を起し遂に沈沒せり、こゝに開戰第三日にして早くも英國東洋艦隊主力は全滅するに至れり。

開戰の劈頭ハワイに敵主力を葬つたわが海軍は再びここに英國海軍の最先列にある巨艦を南海の底に葬つたのである。正に世界の海戰史家をして、啞然驚嘆せしめた歷史的大偉勳である。

——從來、支那方面にあつた英極東艦隊の主力が、シンガポールに移つてからは、巡洋艦を主力として空陸軍ともにマレー防衛に專念してゐたが、日米關係急迫を告げるとゝもにプリンス・オブ・ウエールズ及びレパルスの二主力艦が急派されたのである。兩艦が、堂々シンガポールに入港したのは昭和十六年十二月二日だつた。同市の英兵及び敵性人は、

「これでマレーの防備は大丈夫だ。さまア見ろ」

と、狂喜して大氣焰をあげた。

十二月八日の早曉、わが方の電擊的な作戰が開始されるや、英國側は愕然とした。——從來の支那事變における日本の作戰は、常に一寸進みの戰法をとつて、一歩々々ヂリ〳〵と着實に戰果を擧げて擴大してきたゝめ、米英はてつきり今度もまた

（日本軍はまづ泰國を通過して、ビルマを衝くくらひが落ちだらう）

位にしか考へてゐなかつた。

八日未明、わが海の荒鷲が大擧して、シンガポールを急襲した時は、街にはまだ煌々と電燈が點いてゐた。燈火管制もない軍港のだらしなさ。——この朝、ハワイ邊と同じく、氣流の狀態は頗る惡かつた。雲は南支那海を低く蔽ひ暗澹として視界は不良であつた。

やつと一週間前に、着任したばかりのイギリス東洋艦隊司令長官フイリップス提督坐乘の旗艦プリンス・オブ・ウエールズは、八日夜か九日朝かに、レパルス以下驅逐艦三隻を從へて、シンガポールを出港、わが敵前上陸部隊輸送船團を襲擊せんものと密かに北上しはじめたのだ。

「敵艦隊を發見す」

との無電は、わが潛水艦から即刻〇〇基地の爆擊部隊へ飛んだ。この報告が來た時、〇〇基地の一同は總立ちとなつた。つひに來たのだ。此日のため、たゞこの日のため、たゞこの日のためにのみ死よりも苦しい猛訓練を積んで來たのである。

「萬歲！」

疼くやうな喜びが思はず一同の口を衝いて出た。

「各部隊直ちに出發用意」

の命令は八方へ飛ぶ。

「つひに敵艦が出をつたぞ」

云ひ知れない緊張感の流れの中に、愈々待望の敵主力艦の出動、赤道直下百三十度の汽罐の傍で、眞赤になつた機關兵たちが嬉しさうに笑つてゐる。甲板に立つて闇夜を透して見ると、雲は低く、波頭に連らなる視界は茫々、わづかに僚艦の信號燈が、微かにゆらめき見えるだけである。命令は口から口へと傳へられてゆき、全員武者慄ひを始めた。

「敵は近い」

〇〇艦の艦底まで、丁度谺のやうに靜かに傳令はながれて行く。〇〇艦は、もう敵の作戰地域に入つてゐるのだ。甲板上の主なる部分は、ハンモックで作られたマントレットで防護され決戰の用意はよい。

一方、敵の旗艦プリンス・オブ・ウエールズを先頭に、英艦隊はマレー半島東海岸を北に向つて航行してゐるとき、司令長官サー・フイリツプス提督は旗艦ウエールズ號上から、次の如き歷史的信號命令を發した。

「我等は今、日本艦隊を求めて航行中で、戰艦〇〇と輸送船團より成る日本艦隊を奇襲せんとす。本官は各員その本分を盡さんことを期す。」

そして九日になり、赤い太陽が西に沒せんとする頃、敵英艦隊は、日本艦隊に接近しありとの情報に接して方向を變へた。その翌朝敵艦にとつては全く豫期しない悲慘事を起した。十日朝レバルスに向つて、〇〇フイートの高度で近づいてくる〇〇機の日本空軍を發見したからで

ある。

それもその筈である。前日の夕刻早くもわが荒鷲の第一陣が飛び立つてゐたからだ。日沒までは僅かに一時間半しかない。目的地點までは相當遠い。日沒までに敵を發見出來るかどうかまつたく分らない。だがやつつけるのだ。各部隊は勇躍基地をとび立つてゐたのだ。

二、わが潛水艦の活躍

天候はひどく惡く、上つても上つても分厚い雲だ。時々雲の切れ間から海が見える。雲の密度はます〳〵濃くなつてゆく——雲の下では物すごいスコールが暴れてゐる。南方特有の荒天だ。

いつの間にか視界はまつたく暗くなつた。何も見えない。たゞときゝ雲の中に難航する僚機の翼の燈火が、烈しく上下するのが見えるばかりだ。目的地點でスコールを衝いて雲下に出てみたが、敵艦隊はすでになく、海上はにぶく不無味に光つてゐるのみだ。視界はまつたく利

かず、索敵はまつたく絶望、萬事休した！　隊長機から反轉の命令が出た。

無我夢中で飛んで行つたのだが、歸りの脚は重かつた。

妙に疲れたやうな腹立たしさで一杯だつた。基地へ歸りついたが、飛行場はまつくらだ。直ちに明朝の攻撃準備だ。操縦士のみはぜひとも睡眠をとるべしといふ命令だが、誰も眠れなかつた。全員晩飯もとつてゐない。だが誰も食事のことなどは忘れてしまつて、明朝の準備と攻撃の計畫に夢中だ。――夜のうちに敵艦が、シンガポールに迯げこみはせぬかと思ふと、じつとして居られぬ。焦だたしさに襲はれるのだつた。

十日午前三時四十分、――待ちに待つた潜水艦からの報告がきた。敵艦は二十節の速力でシンガポールへ迯走中といふのだ。

わが潜水艦の活躍と苦心をこゝに物語らねばならぬ。わが潜水艦は開戦と同時に、マレー沖に進出、僚艦とともに隱密哨戒に從事した。この時すでに、「敵主力艦二隻シンガポールにあり、出撃せば直ちに撃滅すべし」の命令を受けてゐたのである。十二月九日は、朝から天候惡

くスコールがしばしば襲來し視界極めて不良であつたが、マレー東岸における陸軍の敵前上陸に協力し、わが潜水艦は嚴重な警戒の目を光らせてゐた。もちろん艦體は海中に沒し潜望鏡が唯一の眼であつた。午後三時十五分、その潜望鏡に突如二つの黑點が映つた。

左方はるかに雲が低く漂ふところに見えてゐる。この黑點は見る〳〵大きくなつて來た。○艦長は眸をこらした。二隻縱隊となつて北上してゐる。一隻はマストが甚しく高く、艦橋が特異な形をしてゐる。――これこそレバルスではないか。敵主力艦隊先登の一番艦は、これよりもう少し艦橋も低く、艦型も不明だが、堂々たる三萬五千噸級主力艦である。好敵見參、直ちに襲撃體形を整へた。折しも猛烈なスコールが襲來した。百メートル先も見えない。わが潜水艦はこの時まづ第一電を發した。しかるに無念スコールが通り過ぎるや、忽然として敵戰艦は視野から消えたのである。

午後四時二十分、浮上進撃に移つた。そして最大の速力でこゝぞと思ふ方面に驀進した。「石に嚙りついても捉へずんば止まず」との司令の命令である。

浮上進撃二時間、わが目標に狂ひはなく、午後六時半に再び艦影を發見した。この時敵二隻は今までの北上體形から轟轉して、西に向ひつゝやがて南方に進度を變へわが潜水艦に正面切つて進んでくる。魚雷は裝塡された。「射て！」といへばすぐ飛び出すやうに用意された。乘員一同聲を發するものもない。急速潜航により艦内は靜寂そのものとなつた。撃たずんばやまずの氣魄だけが艦内にこもつてゐるのだ。

はるかに敵はまたも反轉し、北上しはじめた。機を逸せず、浮揚進撃に移つたが、その時飛行機二機前方より艦尾に向つて突進して來た。敵飛行機の哨戒である。刻々敵は離れる。逃してはならない。限前にある姿を眺めながらわが潜水艦はやむなく急速潜航を行ひ、この結果敵主力を見失つた。——しかし僚艦も、飛行機も出動したに違ひない。しかし、敵はわれらを知らざるものゝごとくマレー沖を游弋してゐた。

かくて一旦飛行機の攻撃より避難したわが潜水艦は、再び浮揚進撃に移つた。午後九時南海の空も漸く暮れそめ、しかも細雨となつた。視界は二キロに及ばぬ。敵にぶつかればその時は

わが潜水艦と心中だ。射て！ の唯一言の命令で魚雷が飛出すやう手配も定まつて乘員一同緊張した。

明くれば十二月十日、長時間にわたり雨天狹視界のあと、つひに潜水艦は敵主力を發見して直ちに無電を發したのである。

一方、海の荒鷲たちは、この無電を受取るや、

（今度こそ）

と、誰もの目にも固い決意が燃え上つた。時速二十ノットとすれば、アナンバス諸島の南方五十浬位の洋上で、追ひつける見込みはある。索敵の〇〇機は、勇躍出發した。

いよ〳〵出發だ。無念眠れぬ涙に濡れて一夜を明かしたわが荒鷲は、今日こそやつつけねばならぬと全員ハリきりたつてゐる。どの顏を見ても、もう徹夜の疲勞など微塵もない。ハチ切れんばかりの戰鬪意欲が顏いつぱい滿ち溢れてゐる。薄明りの基地で出撃の訓示をする〇〇司令の眼は、決意と緊張でギラ〳〵と光つてゐる。

「千載一遇の好機だ。全力をつくしてやれ。みんな死んで歸るのだ」
「はい、死んで歸ります」
司令の訓辭に答へるやうに、極めて自然に全員のまなざしがかう答へた。少しの不自然さもなかつた。死といふことがこの時ほど容易に當然におもへたことはないやうだつた。
午前七時五十分。〇〇部隊の雷擊隊と爆擊隊が出發、續いて〇〇部隊、〇〇部隊の雷擊隊が相次いで離陸。
上昇する、上昇する。そして大なる決意、大なる確信、それは荒鷲の勇士だけに通じる氣持だつた。空は明るくなつた。雲量はきのふより少ない。
「よし、もう大丈夫だ！」
どの機にも戰友の嬉しさうな張りきつた笑顏が見える。雲の間になつかしい教官の面影がチラッと浮ぶ。しつかり遣れッと激勵されるやうな教官の面影だ、さうだけふこそ日頃の訓練を發揮しなければ――とおもはず齒をギリ〳〵と嚙んだ海鷲編隊は、〇〇メートルの高度を保つ

て、一氣にマレー沖へ飛んでゆく。
だが〇時間も飛び、すでに報告された海上まで來たが、どこにも敵影はない。青い海原が涯しもなくひろがつてゐる。フッフッとかすめとぶ白雲。――各隊が微かな焦燥を覺えながら、相前後して引返しはじめたころだつた。三番索敵機は眼に敵艦らしい五つの黑點を發見して、よく確めるため雲下に高度を下げたとき、突然、先頭の艦上にパッと赤い信號をみとめたかとおもふと、はるか下方でパット白い煙が上つた。擊たれてゐるのだ。
「敵艦だ！」
こう直感すると、キイを叩いた。
「敵主力艦見ゆ、北緯四度、東經百三度五十五分」
午前十一時四十五分、歷史的な第一報だつた。

三、敵戰艦の轟沈撃沈

反轉中の〇〇部隊機は、無電をキャッチすると一路機首を北方へ向けた。目指すはクアンタン東方五〇マイルの洋上である。續いて零時五分、第二報は、

「敵主力は驅逐艦三隻よりなる直衛を配す、航行順列はキング・ジョージ型レバルス」

と報じてきた。機内には期せずして歡聲があがつた。全搭乘員の目は一ツになつて海上に燒きついてゐる。十數分位たつたときだつた。〇〇部隊長の率ゐる爆撃機隊は、雲下はるかに南下中の敵主力を發見した！　おゝ見よ。プリンス・オブ・ウエールズを一番艦とし戰艦レバルスがこれに續き、その手前には、一番艦を圍むやうに驅逐艦三隻が三角陣をつくつて先行してゐるではないか。堂々たる單縱陣警戒航行順列だ。各艦の蹴立てる眞白い波がひどく印象的に眼に泌みる。零時四十五分！

「突込め！」

號令が條機に傳はつた。

「高度を下げると、敵艦は一齊に防空砲火を撃ちはじめた。機の上下左右にすきまもなく高角砲彈が炸裂する。このときウエールズ號は、二十八ノット乃至三十ノットの高速度で遁走をはかり、一齊に高角砲、ポムポム砲、高射砲をうち出したが、わが空軍は、正に神技にひとしい技術と勇敢さをもつて、艦上〇〇メートルにまで大膽な低空爆撃を敢行し多數の命中彈を浴せた。

一彈は見事に二番艦レバルスの中央部に命中！　灰黑色に塗つた胴體から茶褐色の火焰が噴き出した。

爆撃隊はさらに大きく彈幕の中を旋回し、二度目の爆撃に移らうとしたとき、〇〇雷撃隊の一隊は、敢然敵艦目がけて雷撃に移つてゐた。

左右に分れた雷撃隊の一隊は右よりウエールズへ、他の一隊は左よりレバルスへ猛烈な雷撃

を加へてゐる。巨大な水柱がウエールズからあがつた。命中したのだ。

一分間に六萬發の彈丸を發射する二十五聯裝の二十ミリボムボム銃三基、二十聯裝一基、四十粍の八聯裝四基の高角機銃と五・二五インチの副砲十六門、四・七インチ高角砲四門を有するプリンス・オブ・ウエールズはその全防空機能を擧げて必死の防禦をやつてゐる。

ザーツ、ザーツ！　スコールのやうに彈丸の幕が行手を遮ぎる。空いちめん〇〇メートル位の高度に、黄色い硝煙がたちこめ炸裂する砲彈の破片が、海上一面に砂囊を投げつけたやうに物凄いしぶきを立てゝゐる。目も口も開けられぬやうな烈しさである。續いて〇〇雷擊隊の大編隊も、この敵團を發見した。

雲下にチラと敵影を見たかと思つた瞬間、視界は濛々たる亂雲層で斷たれてしまつた。海面〇〇メートルぐらひから〇〇メートルぐらひまでつゞく分厚い雲である。約十分間、夢中でこれに突込んだ。一寸先も見えぬ雲中を僚機は見事編隊を崩さず隨いてきてゐる。一時四十八分、雲が切れた。

下を見ると、目指す敵艦の胴體が眼下に横つてゐるのだ。隊長機を先登に突込めの態度がとられた。雲を出ると雨のやうな砲火だ。見る〳〵うちに視界は黄色い硝煙で蔽はれてゆく。——まづ隊長機が海面すれ〳〵まで突込んだ。

續いて〇機の全機が、プリンス・オブ・ウエールズ號に襲ひかゝつた。と、その間、ウエールズの胴體からマストほどもある水柱が上つた。命中したのだ。

續いて數本水柱があがる。魚雷發射と同時に各機の巨體は、艦橋すれ〳〵にウエールズを飛びこえ、艦橋目がけてはげしい掃射を浴びせかけた。

〇隊〇〇機はこの時二番艦へ襲ひかゝつた。轟然！　レバルス號の後尾に水柱が上つた。二番機が火達磨となつて海中に自爆したと同時に、二番機の放つた魚雷がレバルス號の眞中に命中、二本目の水柱が上つた。

續いて艦首すれ〳〵に眞紅な火焔が一條の煙幕のやうな帶を引いて走つた。三番機が自爆したのだ。

「畜生ッ！」

一瞬皆の胸に怒りにちかい感情がこみ上げた。だがそれはすぐ消えて、

「立派だ！　見事な最期だ」

といふ感嘆にかはつてきた。

「こんな美しい死方が出來ればそれでよいのだ。生きてかへりたくない。死んで歸りたい」

誰の胸にも不思議に同じ氣持が動いてゐた。

高角砲の目のくらむやうな曳光の中で、レバルスの水兵が甲板に倒れてゐる姿がはつきり見えた。わが掃射を避けるやうに右手で顏を蔽つた水兵もゐた。一彈は艦載機吊上機を木葉微塵に破壞した。全員は必死となつて消火に努めてゐる。乘員達は、重油にまみれながら傾斜した甲板を、我先きに避難せんと右往左往してゐる。海中に飛込んで救命艇や木片にすがつて漂流しつゝあるもの、阿鼻叫喚の修羅場だ。――かゝる中をわが機は大きく旋回してゐる。

ふりかへるとレバルスは、黑煙に包まれて、大きく傾斜し、ウエールズも左に傾き、グッと

速力が落ちてゐた。

「萬歲！」

隊長がまつ先に叫び出した。つゞいて機內にはどつと勝鬨が沸きおこつた。

このとき、左前方の敵驅逐艦が、突然猛烈に爆破し瞬時にして海中に沒してしまつた。僚機の放つた魚雷一發が見事に命中したのだ。間髪を入れぬ轟沈であつた。

つゞいて最終隊の〇〇爆擊隊が、痛手を蒙つて迹げまどふ敵艦の上空に姿を現はした痛手を蒙りつゝも敵の砲火は依然として衰へない。さすがは海賊上りの英國海軍だ。

思ひきり高度を下げて爆擊に移つたときだつた。突然、機體が竹箒で撫でられるやうな音がした。

砂礫のやうな高角砲彈が命中してゐるのだ。全機ブリンス・オブ・ウエールズに直擊を敢行。うち一彈は後部甲板の檣に見事命中したのであらう。轟然たる爆音が起つて茶褐色の火焰が立上つた。

旋回してふり返れば戰艦レバルスがまさに轟沈するところであつた。

この時、サー・トーマス・フイリツプス提督は終始艦橋に立つてゐた。レバルスが將に轟沈せんとする刹那、驅逐艦が側に寄り、

「乘艦せられたし」

と信號したが、

「ノー・サンキユー」

と答へ艦橋で擧手の禮をしつゝ艦と共に運命と同じうした。リーチ艦長も、フイリツプス提督とならんで擧手の禮をなし、レバルスが棒立になると吸込まれるやうに海に消えてしまつた。一瞬にして巨體は海中に沒してしまつた。

今ははや海上一面にたゞ黃褐色の油が煙るやうに擴がり、無數の浮流物の漂ふ中に、二隻の驅逐艦が救助作業を續けてゐる。最後の止めを刺した〇〇爆擊隊は、かくて全機歡呼のうちに引揚げて行つた。

このころ三番索敵機は、第一報を打電して以來、依然上空を旋回、二時間にわたる海空の死鬪を逐一報告しつゞけてゐた。レバルス沈沒を目擊した同機は更に高度を下げた。今はウエールズの最期を見屆けるばかりである。

中央と艦尾から濛々たる黑煙を吐き、左に大きく傾きつゝウエールズは、八ノット位の速力で走つてゐる。その直後を驅逐艦が一隻追尾してゐる。段々速力が落ちてきた。愈々最後かと思つた時、驅逐艦はズーツとウエールズの舷側に近づいてきた。その途端つゞいて二回プリンス・オブ・ウエールズの巨體に大爆發が起つたと同時に、艦尾から不沈戰艦の巨體は徐々に沈み始めたのだ。

「英國の誇」の名が示すやうに、從容として沈んでゆくのだ。約三十秒、沈まざる戰艦はつひにまつたく姿を沒し、あとにはただ海上に巨艦の破片と重油が漂ふのみであつた、附近一面の油の上を强烈な、南の太陽がギラ〳〵とひかつてゐた。

なぜかひどく物靜かな光景だつた。夕刻近く死鬪を終へた荒鷲は續々基地に歸還した。あゝ

多年鍛へぬいた海軍魂は、遂に不沈戦艦を沈めたのだ。

——迎へる〇〇隊司令は泣いてゐた。大任を果した搭乗員も泣いてゐる。地上勤労の人たちも泣きながら、戦友の手を握りしめるばかりだ。何も云へない。何も云はないたゞ抑へきれぬ感動が、嵐のやうに全員の胸中を走り廻るのみだ。イギリス東洋艦隊主力はつひに全滅した。

沈没の直前、敵驅逐艦が一隻ウエールス號に横附けになつたのが機上から見受けられたが、乗員の一部はそれに乗り移つて救助されたらしい。わが方の損害は飛行機三臺だけだつた。

わが無敵空軍が敵の最後を認め、機首を揃へたころ、遙か後方に、敵戦闘機八機が遅ればせながらやつて來たのが見うけられたがすべては後の祭だつた。

一方我が〇〇艦では、友軍の荒鷲部隊が追撃を開始したとの報が入つて來たとき、地點を調べてみると、マレー半島〇〇沖の本艦位置からいくらもない。〇〇艦は急スピートを加へた。三十分、四十分、そして、

「決戦の間に合ひたい。一發でもいゝから横つ腹にお見舞ひしたい」

射手の水兵さんが血走つた眼で、前方をにらんでゐる。と、「レバルス號轟沈」との無電が快報を傳へてきた。

「わアッ」

と、艦内に歡聲があがつた。續いて「プリンス・オブ・ウエールズは傾きつゝ遁走中」の無電だ。

「萬歳！　萬歳！」

肩を叩きあつて萬歳を絶叫する。機關兵も、射手も、士官も、水兵も、皆萬歳を叫んでゐる

〇〇基地からの無電が櫛の齒を引くやうに入つてくる。「レバレス轟沈！」「プリンス・オブ・ウエールズ撃沈！」更に艦名不詳の大型驅逐艦一隻の撃沈だ。海の若鷲は、今日こそ思ふ存分日頃の腕にものを云はせたのだ。

「立派だぞ海鷲、嬉しいぞ海鷲！　俺たちは、絶好の獲物を失つて殘念だつたが嬉し涙がボロ〳〵出てとまらない！」

翌々日、〇〇隊の一隊の荒鷲は、再び激戰場の上空を飛んだゐたが、眼下には何事もなかつたやうに蒼い波頭が輝いてゐた。この波頭へ向けて、搭乘員たちは大きな花束を落してやつた。最後までたゝかひ拔いた英海軍の數千の英靈よ眠れ、戰ひにつよい海鷲のやさしい心やりであつた。

思へば當時の空模樣が、わが方に極めて有利であつたことは正に天佑といふべきであつたが、それにも增して、この大戰果は、大御稜威の下に不屈の精神力と不斷の訓練によつて築きあげた實力、そして世界に冠絕する優秀な兵器の賜物である。

第五　大東亞海戰の解說

一、海の荒鷲の猛訓練ぶり

荒鷲によつて、果して近代裝備の戰艦を擊沈する可能性があるか、と云ふ問題は前歐洲大戰が終つてから航空兵力がやうやく擡頭しはじめて以來の懸案であつた。そして軍事豫算を計上して軍備を充實する場合、軍艦と飛行機とを、いかなる割合に豫算を配分すべきかの點について、世界各國の軍事專門家の間に意見の相違があつて議論の上では決しなかつたのである。

第二次大戰が勃發しても、獨空軍と英艦隊の間ではこの謎は解かれなかつたのであるが、今次大東亞戰爭では、その緒戰においてこの難解の謎を解く鍵を、わが海鷲によつてあたへられ

たかの觀がある。ハワイ眞珠灣とマレー沖の海戰のごとく、わが精鋭無比な海鷲の前には、米英の金にあかした戰艦もつひにものゝ哀れを止めてしまつたのだ。

だが尨大なる豫算を計上しての數と、機械力ばかりではこの方程式は解けるとはいへない。——要はこれを運用する皇室をおもふ熾烈な精魂と猛訓練による實力がともなはなければならない。イギリスの海軍が、獨戰艦ビスマルク號を沈めたとき、イギリスの飛行機は魚雷九本もあてゝおきながら沈沒しえなかつたではないか。そこで夜間驅逐艦がうちこみ、巡洋艦がうちこんで、合計三十六本の魚雷をあてゝ最後にドウゼットシヤといふ巡洋艦がやうやく止めを刺したのであつた。

ハワイ、マレー沖の海戰では一つの魚雷が命中し、さらにその穴に次の水雷が入るといふ命中ぶりであつた。それだからこそ一分間以内に沈む轟沈といふ神技まであらはれ、全世界をして驚倒せしめたのである。マレー沖に於てプリンス・オブ・ウエールズ及びレパルスを轟沈、爆沈せしめたときの狀況も同樣である。

わが海鷲が襲ひかゝつた時、敵戰艦は、すべての防禦砲火の火蓋を切つて、實に一分間數萬發の彈丸のふすまを張つて、ふせいだが、わが海鷲はそれらの彈幕の中を悠々しかもまつしぐらに突込んで行つたのである。一死報國の精神が脈々としてゐるではないか。

總ては廿年來猛訓練の賜物だとばかり一口にはいひたくない。第一太平洋や南洋と一口にいふがどれだけ廣いか。そこに細菌よりも小さい敵艦を索めることが如何に困難なことか。そして假にハワイのごとく航空母艦だとしたら何處にゐるか分らぬ母艦へ無電や星を頼りに歸らねばならぬ。一分一秒の狂ひがあつてもならない。これは平面三角では割切れない。微分積分とか球面三角とか、むづかしい高等數學の運算をあの少年航空兵たちが立派にやつてのけてゐる。少年航空兵にこれらの基礎知識を與へ、人格を磨くために實に三年の歳月を要してゐる。

一年たつと「國のため死す」といふ氣になり、更に一年半たつと「敵を倒すまでは斷じて死なぬ」との鬪魂を身につけてくる。四年目に始めて操縱、發動機の構造などを學ばせる。一年で宙返り、燕返し、横轉、逆轉、何でも出來るが、しかしまだ母艦へは乘せられない。五年目に

無電を敎へ、基地から海上へ飛出し、また歸る訓練、夜間飛行をやる、實彈射擊をやる、急降下爆擊をやる。〇千メートルの上空から〇〇度、〇〇度の角度で的に向つて舞ひ下りる。その速度は大體音波の秒速三百メートルに近い一秒の何分の一遲れても大地にめり込んでしまふ、それ自體決死の訓練である。

さらに雷擊を敎へるのだが、では五年目に一人前かといへばまだ母艦では使へない。六年目に母艦に下りる訓練だ。——その上、海は常に靜かだとは限らない。何十度かに傾き、動搖常ない母艦上への着艦がいかに困難であるか。かうして六年目が終り七年目にはじめて飛び出す練習だ。

重い爆彈や魚雷、それに無電機、機關銃、燃料を積んで飛び上るには普通の飛行士ならすくなくも三四町の滑走路を必要とする。だが母艦の長さはそんなにない。八年目に紅顏の少年が無精髭を生やしてやつと一人前になる。轟沈といへばたとへ魚雷をぶち込んだにしても二つや三つやで沈むと思へない。狙ひさだめての一彈である。單なる技倆ではないのである。

かゝる米英人達の考へも及ばない最高の積極的精神力「海鷲魂」の上に不斷の猛訓練の技術がつまれ、こゝに不可能の三字を抹消した海鷲が、どし〳〵と育まれてゐるのである。頼もしい神國日本ではないか。

二、「轟沈」と不沈戰艦

わが海軍が渾然たる精神力と技術とをもつて、不沈戰艦であつた筈の英東洋艦隊の旗艦プリンス・オブ・ウエールズ號と戰艦レパルスと、改裝後防禦能力を一新したといふアメリカのウエスト・ヴァージニア號を屠つたことは、わが海軍力の眞價を發揮したものとして、列强專門家の驚嘆の的となり、早くも戰艦無用論さへ擡頭しようとしてゐる。

戰艦ははたして空軍の敵ではないのか。不沈戰艦の正體をあばき、二艦の防禦配置から調べてゆかう。——プリンス・オブ・ウエールズ號こそは、英海軍が傳統と誇りをもつて、その技術

を傾けて建造した云はゞ英海軍そのものを象徴する最新鋭の主力戰鬪艦であつた。かのビスマルク號の追跡に一役買つた、キング・ジョージ五世號とは姉妹艦で、わが昭和十六年四月に竣工したばかりである。それがムザ〳〵海底の藻屑と化し去つたのである

防禦裝甲の重量が、排水量の三十パーセントにすぎなかつた英のクイン・メリー號が、砲塔の天蓋をつらぬいた獨の三十八糎彈一發で轟沈したことから、プリンス・オブ・ウエールズは裝甲部分の重量配分を四十パーセント程度に高めてゐる。

その一方、これがために速力や航續力或は攻擊力などを犧牲にしまいと、あらゆる最新の技術を傾け、前大戰當時に較べて、艦隊では約六%、機關では約四、、計一〇%以上も重量を輕減した。

また、その機關は、比較的新しいネルソン級に比較しても、なほ一五%輕重であるといふ。そればかりではない。この艦が普通なら四十糎砲九門あるひは三十五糎砲十二門積むところをいかに威力が從來の三十八糎砲にまさるとはいへ、三十五糎砲をわづか十門にとゞめ、しか

も、種々の技術的困難を冒して世界最初の四聯裝砲塔を採用したのは、もつぱら武裝重量を節約して、防禦にふり向けようとしたゝめに外ならないのである。

四聯裝砲塔にくらべて、砲一門あたりの裝甲重量が約十五%へつてくる。詳述すればこの四聯裝砲塔は、側面に厚さ三十八糎前の防楯には、四十糎の鋼板を張りめぐらしてをり、一基の重量は一九五〇噸、もし、このかはりに二聯裝砲塔二基をするゑると、その合計が二千三百噸になる。かうして差引き、三百五十噸前後二基の四聯裝砲塔で、合計七百噸だけ重量や容積をへらし、その分は重要な甲板とか艦側の防禦にあてようといふのである。

近頃の戰艦は、貫徹力の大きい五百——千瓩重爆彈や、三萬メートルの彼方から大角度でおちかゝる重さ一噸以上の砲彈にさらされる。したがつて甲板防禦をとくに重視し、これに割く重量の艦側防禦重量に對する比率は、前大戰當時の三十パーセントから今では百%以上にふえてゐる。

プリンス・オブ・ウエールズは、甲板防禦に非常に強靱な獨得の鋼板をつかひ、厚さ十六糎の

裝甲を幾層にも施して砲彈をくひとめ、爆彈なら一噸半のものでもはじきかへすといきまいてゐたものである。下甲板の裝甲は、椀を逆に伏せたやうに機關部、火藥庫を覆ひ、これとY字形に接續してゐる。艦側の防禦は、吃水線附近を前部主砲塔から後部主砲塔にかけて、約百七十米の長さに亙り、厚さ四十糎の鋼板をはつて萬全を期してゐる。

このやうにして、甲板と艦側の防禦には、約一萬四千噸の裝甲を費し、その上、丁度バルチを艦の内側へとりつけたやうな工合に、舷側附近の艦内に、縱横の幾段もの仕切りを設け、魚雷や機雷にやられた場合、その被害を局限して沈沒を防ぐやうになつてゐる。

この不沈戰艦が沈んだのである。

アメリカのウエスト・ヴァージニアはどうかといふと、この艦も、速力を犧牲にして、防禦に力瘤を入れる米海軍の傳統をつぎ、主要個所の裝甲は英國の舊式艦よりも五糎ほど厚い。

砲塔の要部は四十五糎、煙突の附根は三十八糎、吃水線附近が三十五糎で、さらに建造費以上の費用をもつて改裝に改裝をかさねてゐる。檣は强固な日本式の櫓檣にかへ、水平防禦と水

中防禦とを、とくに强化して、魚雷の被害輕減につとめるといつた工合である。

この改裝にとりかゝる前のこと、米海軍當局は魚雷や爆彈をつかひ、戰艦の念入りな實地破壞試驗をくりかへしたことがある。

その結果からして艦内の隔壁や裝甲について特殊の構造を編み出し、戰艦の改裝はすべてこの方針に從つたので、いまやいかなる攻擊に對しても、絕對の安全を保障出來るやうになつたと揚言してゐたものである。その試驗がどんなものであつたか。何を研究してゐたのか。——わが空中魚雷や爆彈を海の荒鷲さては特別攻擊隊の前には一たまりもなかつたではないか。

いま、三萬五千トンの戰艦では、いかに技術の粹を傾けても、速力、航續力、砲力の致命的な犧牲なしには、魚雷や爆彈に對して不沈性を確保出來ないといふのが列强專門家の結論のやうだ。

それで、現在の攻擊兵器に對しては、まづ四萬四千噸もあれば、どうにか沈むまいといはれる。この四萬五千噸艦の内譯は、艦體が一萬三千七百噸、武裝が七千六百噸、機關が三千三百

噸、糧食などに九百噸、最後に裝甲に對しては二萬百五十噸で、實に排水量の半分に近い四〇%を占めることになる。なほ、この艦は三十八糎の主砲八門を有し、十一萬馬力で二十七ノット、十八萬馬力で三十ノットの高速を出す。そこで今度の大慘敗によつて設計に大變更を加へることは必定であり、捲土重來するであらうことをわれらは忘れてはならないのである。

三、雷擊機の話

飛行機を魚雷運搬に使用すると云ふ考へは、卽ち雷擊機を創るといふ考へは既に久しい以前から發生したもので、飛行機が生れて間もなくその發案は有つたのである。

飛行機から魚雷を投下する最初の實驗は、イタリアの飛行士カッソニによつて既に一九一一年に行はれ、英海軍は一九一二年及び一三年に以下引續いて投下實驗を行つた。雷擊機が海戰に始めて使用されたのは一九一五年の八月十二日、英の雷擊機がトルコ汽船を爆擊してその航

行能力を奪つたのが最初とされる。その後第一次大戰終了後も、各國では雷擊機に關する研究は續行された。

日本海軍には約二十年前から、連綿不斷の研究を弛めず、今日の最高度までに達してゐるのである。又これが實に今日の大戰果を擧げるにあづかつて多大の力があつたのである。

雷擊機は現在では戰略戰術の上から見ても極めて有能な兵器の一つとなつて來た。實戰における例によつて見ても、水上艦及び潛水艦との共同作戰に好適であり、かつ沿岸地區の海戰では、爆擊機、戰鬪機、地上軍隊との共同作戰によつて、著しい戰果を擧げることが實證されてゐる。またその本來の使命ともいふべき敵主力艦に對する有力な攻擊兵器の一つとなつた。

そのほか混亂に陷つて退却する敵艦隊に對してこれを追尾攻擊するに極めて大なる適性を備へてゐる。また通商破壞戰においては或は獨立的に、また或は水上艦、潛水艦と協同してきはめて有效な攻擊も行ひ得る、雷擊機は夜間の攻擊にも極めて高い適性をもつてゐる。この夜間襲擊が出來るといふことは、雷擊機の非常な特質で、爆擊にしても夜間出來ないといふことは

いへないかも知れないが、何と云つても夜間は雷擊機に歩がある。しかし腕前が要ることは勿論であるが、日本海軍は世界一だ。これは敵艦が燈火管制をしてゐても出來るし、艦型を識別しさへすれば容易だ。暗ければ近接出來るし、この點、急降下爆擊機は無理で非常な高度で爆擊態勢をとらなければならないが、その點雷擊機は接近し易いし、手許へ飛び込みやすい。夜間は雷擊戰術の最も乘ずべき好機である。

雷擊機は、魚雷を腹に抱いて活動するので、機體は搭載力がとくに優れてゐる。わが海軍の雷擊機は世界最優秀のものである。

四、空中魚雷の話

雷擊機と共に一躍空中魚雷が、世界の注視をあびるやうになつたが、まづ米英の魚雷から申し上げてみやう。——英のホワイトヘッドといふ會社が世界の魚雷界の本山といふことになつ

てゐるが、空中魚雷を考へついたのは皮肉にもアメリカが元祖である。

一九一二年に、アメリカの海軍少將フイスクといふ人が特許を取り、一九一六年、前大戰の時英國が實際にこれを使ひ、ドイツの商船二隻を沈めたが、ドイツ側でも英の汽船ジエナ號を沈めたので、商船其他に對しては空中魚雷が相當有效だらうと考へられてゐた。

しかし、軍艦に對しての效力は、十八インチ程度の魚雷ではどうかといふやうな意見があつたが、何しろ二千メートル位の距離に近づいて落すので、ほとんど軍艦は迹げることは出來ず、約半分位は當るといふやうに命中公算がいゝところから、各國とも非常に研究してゐたわけだ。十年位前までは、水面二三十メートルぐらひまで降りて射たぬと、魚雷が毀れてしまふといふ缺點があつて、各國とも大分閉口した。しかし、研究の結果、現在では大體〇メートル位の高度から落しても少しも破損しない魚雷が出來てゐる。今後雷擊機の發達につれて、益々盛んに使はれることゝおもふ。

魚雷を發射すると航跡が見えるので、その航跡をなくすることについて、各國とも頭を惱ま

してゐるが、アメリカでは電氣魚雷といつて、直徑六十三センチ半。インチで云へば二十五インチ、長さ七メートル六百、火藥を三百二十キロもつて、二萬メートルの距離を走らせることが出來るものを發表してゐたが、その成果は未だ明確ではない。最近英國ではエレンと云ふ人が、水素原動機を研究して、六百馬力の魚雷用酸水素エンジンを作つたが、實際にはまだ魚雷につけるまで行つてゐない。

現在一般に云はれてゐる空中魚雷は、飛行機から投下されるために稱せられたので、專門語では「航空魚雷」又は「飛行機用魚雷」と稱して居るが、最近では略稱「空雷」といふ新語が一般には用ひられてゐる。その空雷の構造及び重量と大いさ等は各國祕密にしてゐてはつきり分らない。

その構造は軍艦用の魚雷と大差ないと見てよい。

一度わが無敵海軍が、ハワイを空襲するや、空中魚雷は更に脅威を增し、アメリカが誇る戰艦も眞二つになり、續いてマレー沖では不沈を誇るプリンス・オブ・ウエールズは勿論、レパルスに至つてはわが雷擊機の空中魚雷によつて轟沈されて、米英の顏色を失はしめると共に、將來の海戰に重大な示唆を與へたのである。

五、どうして寫眞を寫したか

大東亞緒戰において、わが海軍航空部隊が敢行したハワイ奇襲作戰及びマレー沖海戰を如實に物語る數種の壯烈をきはめた生々しい寫眞が、新聞紙上や雜誌上に發表され、また同時に映畫も發表され、全國民を新たな感激と興奮に湧き立たせたことは諸子の記憶にもなほ新たなるところがあらう。

その寫眞に一人として驚嘆しなかつたものがあらうか。その寫眞の一葉を見たまへ！ 潰滅に瀕する敵戰艦を眞上から俯瞰したものであらう。左端にぼんやり見えるのはオクラホマ型だ。周圍にドス黑く重油を浮かせて、艦隊の大半は沈沒してしまつてゐる。その隣りの他

のオクラホマ型は舷側に早くも爆彈の命中を受けてゐる。白煙のやうに見えるのがそれである。右端の二巨艦はメリーランド型とペンシルバニヤ型、外側のペンシルバニヤ型の舷側高くあがつてゐるのは、魚雷命中の瞬間の水柱である。命中魚雷の雷跡が海面に一條、はつきりと、白線を描いてゐる。横腹に矢つぎ早に魚雷を喰つて船體は歪曲し傾斜してゐる。殘る中央の二隻は、外側がメリーランド型、フオード島側がカリフオルニヤ型、外側のメリーランド型は既に瀕死で、周圍に流れ出てゐる重油は、わが攻撃の物凄さと敵艦の損害の大きさを語る。爆破のため艦體はすでに中央から切斷、これも歪み傾いてゐる。——かやうな寫眞は、所謂撮影のために撮影されたものではない。

わが決死の勇士たちが、空を掩ふ彈幕の中にあつて、戰鬪中に撮影したものであつて、一枚々々の寫眞は、命がけのものであり、その寫眞こそは、敵艦隊を一擧に撃滅した瞬間を如實に物語るものとして、今までに發表された多くの戰爭寫眞中での王座を占めるものである。

これらの寫眞は、特別な飛行機を飛ばせたり、寫眞專門の報道寫眞家を同乘せしめて撮影し

たものでは絶對ない。わが海軍航空部隊では、出動の際、偵察或は攻撃成果判定のため必ず寫眞機を携行せしめてゐる、海軍では普通寫眞機及び活動寫眞機も兵器の一種だ。航空技術廠をはじめ各航空隊、航空母艦等には相當數配給せられてゐて、つねに實戰的價値を發揮してゐる。

故にそれらの寫眞は、各戰鬪員が激鬪の間にあつて、文字通り決死的に撮影した貴重な大記錄である。戰爭中に寫眞を寫すことは非常に困難な技術で、たとへば急降下して投下した爆彈の彈着狀況を撮影するにしても、物凄い息もつまるやうな降下速度で、目的物に眞一文字に突込み、一定距離に達したときに爆彈を投下する。その刹那機體は急上昇にうつるが、その時の肉體的苦痛は堪つたものではない。しかもその途上にあつて彈着狀況をカメラのファインダーに正確にキャッチするといふことは餘程の體力と熟練を要するのである。

凄まじい壓力のために膝の上に置いた手を、勿論何もゝつてゐない空手を、胸の高さまで持ちあげるのさへ容易な業ではないであらう。そんな狀態のとき、海軍で常用してゐる二三貫もあらうといふ手持式航空寫眞機を、目的の方向に向つて、自由に使ひこなすことはまづ難事中

の難事であらう。

ましてや戰鬪中、彈幕中でのことである。かうした豫想も出來ない困難を征服して、あれだけの寫眞や映畫を撮影した並々ならぬ努力と勇氣に對して、われらは深甚の敬意を拂はなければならない。

それに對していかなる寫眞器やレンズが用ひられたかをいへば、普通寫眞の方は手持式航空寫眞機で、サイズは大カビネ、これは航空寫眞特定の大きさで乾板又はロール・フイルムが使用されてゐる。レンズは大抵テッサーだ。スクリーンはどんな種類のものが使用されたか分らない。使用乾板又はフイルムも市販品と同じもので、何ら特別のものではなくオリエンタル製かとおもはれる。絞り、露出ははつきりしないが、絞りは全開、露出は三百七十五分ノ一秒と云ふところではなからうか。

これらの寫眞が一度世界に公表されるや、ドイツはその赫々たる戰果を祝福するとゝもに、激鬪中に戰鬪員が寫眞並に映畫を撮影した餘裕綽々たる態度を絶讃した。

世界三大海戰

第一　サラミスの大海戰

一、スパルタ武士

西暦紀元前四百八十年、南アジアの大平原を當時日の出の勢であつたペルシヤの大軍は、前敗の恥辱を雪がんため、血に餓えた狼のごとく、楯を差上げ、戈をふりまはし、喚き叫んで西の方ギリシヤをさして進擊した。

この大軍を迎へたギリシヤの有樣はどうであつたか。當時ギリシヤは數多の小國に分立して

ねたが、その中でもスパルタとアテネとは、その勢威とくに強く、殊にスパルタは武を尙び廉潔を好むこと恰も日本武士の俤そのまゝの國であつた。――スパルタでは、男子生れて七歳になると、國立の教練所へ入れて身體を鍛へ武を練らしめる。若し、到底生長ののち武士として國のために働くことが出來ぬほど身體が虛弱であると見たならば、親は現在の我子をテゲトスと稱する山中に捨てゝ餓死せしめる。

國立の教練所では、體操、投槍、擊劍、競走、投球等、武士として必要の課業のみを練習せしめ、膽力を養ふ方法として極寒極暑の折にも、たゞ一枚のマントルを着て藁の上に寢かせる。毎朝河中に入つて冷水に浴し、血の出るまで鞭うつて一言の不平をも洩らしめず、食物を與へず餓に堪へる習慣を養ひ、跣足で惡道を歩かせて困苦を凌ぐの勇氣を起さしめるなど、今日より云へば、むしろ慘酷なほどの冷嚴なる教育を施したのである。その教育は七歳より三十歳までつゞき、その間は暫くも家に歸ることを許されない。三十歳になれば始めて武人となり、一定の職務を與へられるが、しかも家に在つて寢食せず、公會所で、他の武士と共に食事

し、共同寢室で眠ることにきまつてゐた。嚴格な教育や躾を、今日でもスパルタ式といふ場合がある。けれども昔のスパルタは、到底今日より想像の出來るほど生優しいものではなかつたのである。

しかし、この勇壯なスパルタもアテネも、その他の國々もギリシヤの國々は、皆ペルシヤに比べては物の數にも足らぬほどの小國に過ぎなかつた。スパルタいかに強くとも、寡は衆に敵し難いのは自然の理である。こゝに乘じて大國ペルシヤは、たゞ一揉みにギリシヤを揉み潰さんと、紀元前四九二年、まづ第一回のギリシヤ遠征を試みたが、ギリシヤ全土の同盟軍のため散々に打破られ、美事失敗に歸したのである。

それと見たペルシヤ王ダリオスは、大に激怒し、今度こそはと、先づ軍使をギリシヤ各國に差遣して降服を勸め、もし命を用ひざるに於ては、海陸の大軍を以て忽ちギリシヤを踏みにぢらんと脅しつけた。そのために、數多の小國は勢に怖れて降服したが、鍛へに鍛へたスパルタが、どうしてそのまゝ降參しやうか。すぐさま軍使を捕へて、穴(あなぐら)に投込み、ダリオス王に答へ

て曰く、

「汝わが國を奪はんと欲すれば來つてとれ、我何ぞ恥を忍んで汝如きに降らんや」

と。續いてアテネもスパルタと同樣の回答をペルシャに與へたのである。

これを見たダリオス王は、烈火の如く憤つて、數十萬の大軍と六百隻の軍船を率ゐ、たゞ一揉みと先づアテネをさして進擊したが、又もや、アテネの雄將ミルチアデスのために海陸共に散々に打ち破られて、玆に第二の遠征も見事失敗に終つてしまつた。

ペルシャ王ダリオスは、この敗報を聞いて怒り心頭に發し、更に優勢な大軍を發して一擧にギリシャを踏み躙らんと企てたのであるが、不幸にも其機を得ぬうちに病死してしまつた。——ところが其の子クセルクセスの御代となり、ギリシャ遠征は三度こゝに企てられて、今度は總勢百七十萬、兵船一千二百隻、クセルクセス王自ら總大將となり海陸竝び進んで堂々ギリシャに迫らんとした。これ即ちギリシャ遠征の第三次大戰であつて、これより述べんとする壯烈鬼神をも泣かしむべき物語の緒口(いとぐち)である。

クセルクセスのこの企てを聞いたギリシャは、スパルタ、アテネを始めとし、諸國共同一致して此の大敵に當らんとしたことは勿論のことである。黑雲ギリシャの空をたち罩めて雨か風か嵐か全身勇氣に滿ち〳〵たギリシャの諸國は、今や眼にあまる大軍を引受けて、祖國のため、祖先の名譽のため、各自の持場々々を固めたのである。

二、ペルシャ軍希臘に迫る

紀元前四百八十年の早春、ペルシャ百七十萬の大軍は、冬籠りの陣營サルデスを出發して、冬枯の目覺めぬ大平原を西へ〳〵と向つた。限りもない大空には、雪を含んだ綿雲が一ぱいにひろがり、目のとゞくかぎりの野には、枯草が力なく腐れて、若芽はまだ土の底に埋れてゐた。單調な道は全軍の前に涯もなくつゞいてゐた。鐵甲を被り、手に圓形の楯や弓矢を携へたメチア、ペルシャ兵。麻製の胴甲を着、棍棒をかついだアッシリア兵、綿服を着て竹製の弓矢

を引提げた印度兵。獅子や豹の皮をまとつて石の鏃をつけた矢を持つたエチオピア兵、投鎗と劍とを持つたトラキア人の兵。これらの種々雜多な兵種からなつたペルシヤ軍隊は、その涯もない平原の道を、前途の勝利と掠奪との愉快を夢みて、猛獸のやうな眼を輝かしつゝ、飽きもせず進軍をつゞけて行つた。

この殺風景な平原の行軍は、七日七夜の間殆んどぶつ通しにつゞいた。そして、漸く南アジアの平原を通りぬけて、ヘレスポンドの海峽にまで着いたのである。

全軍の前には深い碧色の海が強い光を放つて輝いた。血に餓え、單調にうえた彼等は、どんなにこの海をうれしく眺めた事であらう、ギリシヤは近い！　全軍の意氣は餓えたる狼のごとく荒く、楯を叩き、矛を振つて、その海峽に架け渡した長さ一哩の大船橋を渡つた。

船橋を渡ると、やがてドリスコスの野についた。百七十萬の軍隊は一先づこゝに勢揃ひをなし隊伍を整へ、小亞細亞の沿岸よりアトスの運河を過ぎて西に迂廻した千二百隻の大兵船と、海陸呼び應じて、大河の堤を破るがごとく、陸はトラキア、マケドニア、テツサリア等の小國

を横ぎつて、北方ギリシヤに侵入し、海は、舳艫相ふくんで波を壓しつゝアテネの海上に押し寄せたのである。

これより先、アテネには勇將テミストクレスといふ者があつた。盛んに海軍擴張論を唱へて、衆議を排して兵船を造り水兵を養つたが、ペルシヤが全力を擧げてギリシヤに向つたと聞き、ギリシヤの諸州は急に會議をコリント市に開いた。ところがその會議に於て、ペルシヤの勢力に怖氣づいて一致の行動をとらぬところも出來たので、結局、スパルタは、陸を、アテネは海を、他の小諸國は各々兩國を補助することゝなり、あくまでも不禮なるペルシヤ軍の侵入を食ひとめやうとしたのである。

ペルシヤ軍が南下して、スパルタに押寄せようとするには、必ず通過しなければならぬ一つの難關がある。それはスパルタの北端、一方は海に面し一方は山に迫つたたゞ一條の嶮岨なる坂道——即ち有名なるテルモピレーの要塞である。スパルタの王レオニダスは、こゝに敵を食ひとめんとして、三百の精兵と、輕裝したる歩兵一千人、その他諸國の援兵七千餘人、合計八

千三百餘の兵を率ゐ、自らこの要塞を守つたのである。ペルシャの百七十萬の大軍は、僅かに八千有餘の小兵をもつて守れるこのテルモピレーの嶮要に、雲霞のごとく押し寄せたのであつた。

テルモピレーはギリシャの北門であつた。一足ふみはづせば斷崖絶壁を轉落して、惡魔の舌のやうな波に呑まれ去るの外はない。長さが約一哩、よしや何の妨害もなくとも、百七十萬の大軍が通過するには恐しく永い時日を費さなければならぬのであつた。

眼中すでに全ギリシャを呑んだペルシャの大軍は、この堅固な要塞も何の苦もなく通過しやうと思つたのであつたが、仰ぎ見て今更のやうにその堅固さに呆れ返つた。しかも途中には、血に燃えた命知らずのスパルタ王レオニダス以下八千の將士が、刄を磨いて待ち構へてゐるのだ。流石の大軍も成すところを知らず、空しく五日を北山麓の平原に露營して、いかにしてこの堅壘を攻撃すべきかに考へあぐんだ。が、いつまでもその儘で過す譯には行かぬ。漸く決心の臍をかためたペルシャ軍は、メヂア地方兵が先頭となり、まつしらに突撃を開始したのであ

る。蟻のごとく平原を密集して進みくる敵の大集團を見ると、スパルタ兵の意氣はこゝに天に冲した。

凄しい喚聲と劍戟の響が、濛々と地峽を立て罩めた。數時の後、ペルシャの大軍は散々に、打ち破られて又もや平原の眞中に追ひ返されてしまつた。

しかし、ペルシャ軍も只一度の失敗では容易に手を引かなかつた。更に今度は一萬の決死隊を組織して、遮二無二スパルタ軍を追ひ拂はうと試みたが、又しても必死の抵抗に遭つて、意氣地なく撃退せられてしまつたのである。スパルタ軍にも多少の損害はないでもなかつた。傷く者死ぬ者、戰友の倒れた姿は、矛を執つて馳せめぐる勇士の目を映じて、涙を催さしめることも度重つた。

「祖國よ！　汝はかくして友の亡骸を踏んで戰ふなり」

テルモピーの陣營は、今や勇壯を越えて、やうやく悲愁の色を帶び初めた。その上糧食にも追々不足を感じはじめた。武器も破損して用に足たないのが多くなつた。レオニダス王は、數

度使をスパルタの市に送つて、軍隊及び糧食の補充を要求した。

この時、この勇敢な死守もつひに破られ、レオニダス以下スパルタ全軍を死地に陷入れる一大災厄が忽然として現はれたのである。それはギリシヤ軍中の一兵士エフイアルテスのペルシヤへの内通であつた。勇ましきスパルタは、つひに腐つた一賣國奴のためにその死命を制せられたのである。

三、兩軍の大血戰

雲おのゝく一日の曉、レオニダス本陣の裏、カリドロモスの山上に陣取つてゐたギリシヤ方のフオーキス兵一千は、まだ醒めやらぬ露營の夢を何者かの激しく射出した矢の響に、慌しく破られた。

すは！　とばかりに立ち上ると、驚くべし、ペルシヤの大部隊は、いつの間に探り知つたか

カリドロモスの間道を攀ぢ登つて朝霧の晴間を堂々と味方の背後を襲はんとして攻め寄せつゝあるではないか。これは卽ち賣國奴エフイアルテスの内通によつて、ペルシヤ王クセルクセスが、配下の勇將ヒダルネスに命じて、間道より密かにレオニダス本陣の背後に廻らせ、前後より挾擊せんとする計畫であつたのである。

フオーキス兵は、戰ふよりもまづ驚き慌てふためた。そして間道を扼して敵の味方の背後に廻さぬやうにすべき任務を忘れて、山の高所に駈け上つて、そこに陣立を整へた。けれどもペルシヤ軍の目的とするところは、フオーキス兵を擊破するのではない。ヒダルネスは前途を遮ぎるものゝないのを幸ひに、山上に迹げたフオーキス軍にかまはず、山の麓をめぐつて悠々レオニダス軍の背後に迫つて行つた。

山上のフオーキス兵は、益々驚き急ぎレオニダスの本陣に馳けつけて急を告げた。これを聞いたレオニダスの驚きはどれ程であつたらう。しかも彼は敢然として、突嗟の間に取るべき方針を決定した。守らんか、前後よりの挾擊には、如何なる難闘も遂には敵手に陷るの外はな

い。退いてこの嶮要をすてんか、全滅は必定である。

「さうだ、命の續くかぎり、この嶮路にたてこもつて、祖國のため、全ギリシャのため、花々しく討死せん」

この決心と共にレオニダスは、味方の中から、スパルタ人以外の他國人に、懇々と理を說いてこの要關より立去ることを命じた。殘るは王以下三百のスパルタ人、竝にこのスパルタ人の義烈に感じて、共に俱に死なんとする若干のテスピエー人のみとなつた。

しかも最後は刻々に迫つた。早朝より猛烈なる攻擊が開始した。決死の覺悟を固めたスパルタ兵は、眼にあまる大軍を、或は斬り、或は突き、或は岩角に追ひつめ、海中に突き落したが、いかに決死の勇士とはいへ、鐵石でない限りは傷つき殪れるものも次第に多かつた。弓は切れ、矢種はつき、槍は折れて、物凄い戰場は更に一層の悲慘を加へた。

相つぐ戰友の最後を見たスパルタ人は、今ははやこれまでと、刄をぬきつれて、レオニダス王以下、いづれも喚き叫んで、敵陣に突貫し、息をもつがせず、縱橫無盡に當るを幸ひ斬りた

て薙ぎ立てた。

が、つひに最後は來た。レオニダス王も、重なる負傷に身體の自由を失つて、滿身紅に染まりつゝも、最後までも部下を激勵し、敵中に突入してつひに入りみだれたる敵味方の眞中に、ほまれある戰死をとげたのである。

スパルタの勇士たちは顏見合せて默禱した。そして死物狂ひとなつて、劍を揮つて近づく敵を斬り伏せ、斬り倒し、劍折るれば敵に組みつき、更に窮すれば齒をもつてかみつき、最後の最後までも卑怯の振舞なく、つひにあはれや一人殘らず、壯烈なる戰死を遂げ終つたのである。

死をもつて守つたテルモピレーはかくして陷つた。勢ひに乘じたペルシャ軍は潮のごとくギリシャに溢れ入つたのであつた。時に紀元前四百八十年八月、いまこの古戰場の一隅に、物凄く弔らひ顏なる蒼白の月光に照らし出された一基の石碑の表面には次の言葉が彫り刻まれてゐる。

「旅人よ！
汝スパルタに行かば、我等勇敢なる武士が、國命を守りて、こゝに戰死せることを國人に
告げよ」

テルモピレーの要塞を突破したペルシヤの大軍は、雲霞のごとくギリシヤ大平原に雪崩れこんできた。力とたのむスパルタの主力が全滅したことゝて、その後のギリシヤ全土は、見るも哀れな有様で、またゝくひまにアテネの首府アテネ市も占領されてしまつた。

ギリシヤ諸國は今や陸上の防備は悉く破られた。たゞ海上に浮んだ三百隻の軍艦を命とたのむの外はなくなつたのである。

前に述べたアテネのテミストクレスと云ふ者は、一種の偉丈夫であつた。その母が外國人であつたゝめ、アテネの正市民になることが出來なかつたが、奮勵努力の結果、才智は次第にその鋒先をあらはして、つひにアテネに於て重要な位置を占める人物になつた。

テミストクレスは、何よりも「アテネの將來は海にある」といふ說を固く持して、海軍擴張の

念務を說いた。そして到頭アテネの人々を動かして、ピレウスといふ處に軍港をつくり、二百隻の軍艦よりなる艦隊が出來上つた。——丁度その時、千二百隻の大艦隊と、百七十萬の大軍とを有するペルシヤの遠征軍がギリシヤをさして押し寄せたのである。

四、アテネの海軍

その時、ギリシヤ海軍は、アテネの百二十隻を中心として、その他の同盟國艦隊と合し總數二百八十隻の軍艦を有してゐた。

この同盟聯合艦隊は、名義上スパルタの海將エウリビアテスを總司令官に仰いでゐたが、實際の行動は、軍艦の隻數が多いのと、また、海軍のことに明るいのとで、アテネ艦隊の司令官テミストクレスの意見によつて左右せられることが多かつた。

同盟艦隊は、テルモピレーの陸軍と聯絡を保つために、三隻の軍艦をその間に於て、互にそ

の情況を報じ合ふことにしつゝ、根據地をとギリシャ本土、東エウボイア島との間に挾まつた海峽、オレオス水道に於て、東より進入せんとするペルシャ千二百隻の大艦隊を待ち受けたのである。

ペルシャ艦隊は、これも陸軍と聯絡を保ちつゝ、次第に南下したが、途中大颶風にあつて二百隻の軍艦を失つた。しかし、さすが大艦隊のそれ位には屈せず、丁度陸軍がテルモピレーの要塞に押し寄せたころ、ギリシャ艦隊の根據地たるオレオス水道の眞東に當るトリキリ水道まで進入して來た。アルテミシオン岬には、かねてよりペルシャの哨兵が監視してゐて、ペルシャ艦隊が威風堂々海を壓してトリキリ水道に入るや否や、一發の烽火は高く中空に打ち上げられた。ギリシャ艦隊はこれによつて愈敵艦の近づいたことを知つたのである。

この時、この大事な場合を前にして、思ひも寄らぬ論議が同盟國司令官の間に突發した。それは僅か四分の一足らずの小艦隊をもつて、ペルシャの大船隊に刄向ふのは、まことに無鐵砲であるが故に、一先づ艦隊をコリント地峽まで引揚げやうといふ說である、流石のテミストク

レスもこの反對論を破るのには大に困却した。

恰もその時、トリキリ水道まで進入して來たペルシャ艦隊は、ギリシャ艦隊を挾擊せんとする計畫を立て、そして二百隻の艦隊は早くも本隊に分れて南下した。このことがギリシャ方に聞えたので、退路を絕たれては致し方がない。まづ敵を襲ふて奮鬪を試みやうと進擊した。ペルシャ艦隊も海を蔽ふばかりの大勢を波をけたてゝ迎へ擊つた。ペルシャ艦隊の主力は勇敢と巧妙をもつて聞えたフエニキア人であつた。が、つひにペルシャ艦隊はこの主力のフエニキア艦隊が破られたので、列を亂してちり〳〵に退却した。しかもその夜は稀に見る大暴風雨で、ペルシャ艦隊はその怒濤に卷かれ、沈沒又は大破その數を知らず、大損害をうけたのであつた。

しかも、先にエウボイア島の東を迂回して、ギリシャ艦隊の退路を絕つべき任務を帶びて出かけた二百隻の艦隊は、一隻殘らず海底の藻屑と消えてしまつたのである。

それに反して地の利を占めたギリシャ艦隊は何の障りさへなく安泰であつた。しかし、ペル

シヤ方は大損害を受けたとはいへ、まだ決してギリシヤ軍に劣るどころか、優に二倍以上の勢力を持してゐた。この時、ギリシヤ艦隊に對して齎らされた悲報は、スパルタ陸軍が、つひにテルモピレーに於て全滅したとの報知であつた。

テルモピレーが陷入らば、敵の大軍は潮のごとく南下するに相違ない。しからば海軍がひとり北邊を頑守する間に、ギリシヤ全土は忽ち敵陸軍の蹂躙するところとなるであらう。こゝに勇敢なるギリシヤ艦隊は、オレオス水道を空しく捨てゝ南の方、アテネの南海岸、サラミス灣の本據によるべく餘儀なくせられたのである。

五、ペルシヤ艦隊撃滅

ペルシヤの陸軍は、恰も無人の野を行くごとく、ギリシヤ全土を席捲してアテネの近傍にまで攻め寄せてゐた。今は決斷に迷つて猶豫するときではない。テミストクレスは、使をデルポ

イのアポロ神殿につかはして、神意を伺はせると、その神託に曰く、

「他に施す術なし、汝等たゞ木の壁によれ」とあつた。「木の壁」とは卽ち軍艦である。この時サラミス灣内にあつたギリシヤ同盟艦隊は、總數約三百五十隻であつた。

時恰もペルシヤ陸軍は、アテネ市を完全に占領して、その市街に火を放つた。焰々たる猛火は全市を包んで、陸上のアテネは全く亡び行く。同時に陸軍と聯絡を保つたペルシヤ艦隊は、威風堂々サラミス灣口に押し寄せた。陸も海も我に數倍する優勢なる敵である。しかもサラミス灣口はきびしく封鎖されてしまつたのである。

入口を塞がれ、袋の鼠となつては、一致協力して、死物狂に最後の運命戰を試みるより外にとるべき手段はない。ギリシヤ全艦隊は、かくのごとき狀態下に、その火蓋が切られたのである。

愈々西紀前四百八十年九月二十日の太陽は、朝靄こむるサラミス灣の東に昇つた。ペルシヤ六百隻の大艦隊は、堂々三列の横隊をつくつて、サラミス灣口さしてひた寄せに押しよせた。

例によつて、主力のフエニキア艦隊は、最右翼に位し他の諸國艦隊が中央及左翼をかため、その勇猛にして殺氣立つたことは、舳に蹴立てる白波の渦卷くのにも知られた。

これに對するギリシヤ方は、テミストクレスの考へ通り、主力たるアテネ艦隊を最左翼とし、スパルタ艦隊を最右翼として、その中間に諸國艦隊を置いた。これはまづ敵の右翼にあるフエニキアを擊破する根膽であつた。果してその考へ通り、フエニキア艦隊は他に、先んじて勢ひ鋭く、白波をけたてゝ眞先に突進して來た。「占めた！」とばかりテミストクレスは、一聲高く自國の艦隊に令を下して、猪のやうに猛り狂つてきたフエニキア艦隊の中央目がけて逆様に突進したのである。

愈兩艦隊が接近するや、未曾有の激戰が始まつた。悲絶、慘絶、面もむけられぬ血戰とはなつた。フエニキア艦隊とアテネ艦隊とが衝突して、火花を散らして戰ひはじめるや、全艦隊も殆ど一齊に戰ひを交へはじめて、サラミス灣は、忽ち腥風吹き荒ぶ修羅場と化した。死力をつくすアテネ艦隊は、フエニキア方の正面から攻擊すると共に、その側面へも廻つて、左右から

これをもみ立てた。舷と舷とは接してはなれ、はなれては接した。

フエニキア艦隊の旗艦には、司令官として、クセルクセス王の弟アリアビグネスが坐乘してゐた。そしてつひにの司令官はじめ、旗艦乘組の將卒は、敵艦上に壯烈なる戰死をとげた。旗艦は沈沒した。

司令官戰死、旗艦沈沒と見たフエニキア艦隊は、いままでの勇戰奮鬪にも似ず、意氣沮喪して顏色聊かひるんで見えた。その間に前面よりは疾風のごときアテネ艦隊に駈け破られ、背面よりは、なほも先を爭つて前進せんとする味方の軍艦に押し沮まれ、進退度を失つて、陣形しどろもどろに混亂した。

他の諸艦隊の陣形も次第に崩れそめて、船と艦、人と人とが、狹い灣内に入りみだれ、われ勝ちにと先を爭つて逃げまはる有様となつた。

この大血戰の唯中に、一きは目立つて大艦が、舳に女王旗をひるがへしながら、一アテネ艦のため追ひたてられて、電(いなづま)のごとく逃げ走るのが見えてゐた。——これはかねてよりクセルク

セス王のお覺え目出度き一植民地の女王アルテミシアの旗艦だつた。

ところが、アルテミシアの旗艦が、一直線に遁走する前面にあたつて、丁度味方の大型軍艦が一隻浮んでゐた。ハッと思つたが、止るひまも何もある筈がない。旗艦の衝角は忽ち味方の軍艦の艦腹を勢ひ凄まじく蹴立てた波濤の渦卷と共に突き破つた。驚くひまも救ふまもなく、突き破られた軍艦は忽ちそこに沈んで行つたのである。旗艦は、後より敵に追擊さるゝ苦しまぎれに、沈んだ軍艦の上を突走つて眞直に逃げ出した。

かくするうちに、ペルシヤの艦列は全く亂れた。右に行くもの、左に行くもの、血眼になつて叱咤する艦長の號令もみだれ勝になつた。折から、ギリシヤ方にとつては、これ亦天佑か、午頃より俄かに吹きそめた西方は、たゞさへ浮足立つたペルシヤ艦隊を、灣外へ〳〵と吹き捲つた。狹い灣口は、逃げ出さんとするペルシヤの軍艦によつて芋を洗ふごとき混雜となつた。

時こそ今と、灣内に列を揃へたギリシヤ方は、荒波さわぐ海面を、滿身の力を振つて漕ぎ進み、息をもつかせず亂軍の敵を攻め立てた。風上より整然とした攻擊に逢つては一たまりもな

い。或は沈み、或は捕へられ、二百餘隻の軍艦をここに失つたのである。

奮獅のごとくギリシア全土を席捲した陸軍も、やむなく占領地をうち捨てゝ本國に引き上げることゝなつた。憂愁の雲につゝれまたギリシヤの國運は、こゝに再び開けたのである。

テルモピレーの血戰、サラミス灣の大海戰、共にギリシヤ魂のもつとも華やかに發露したものとして詩聖バイロンを泣かしめたことは衆知のとほりである。

第二　赤壁の江上戰

一、劉備三度孔明を訪ふ

支那に於ける海戰として世に最も名高いものは赤壁の戰であらうと思ふ。海戰と云ふより、江上戰と云つて然るべきこの戰ひは、汎ゆる意味に於て考へさせられる要素を持つてゐる。たゞ自己の武威を張ることにのみつとめて、人を用ふるの明なかつた當時の英雄の中に、その勢ひはさほど大ではなかつたが、漢の人で劉備と云ふ人があつた。

劉備は智者であつた。あまり振はなかつたころから、早くも諸葛孔明の非凡なる才略を見拔いて、自身がすでに一方の將たる身であるのをかへり見ず、言を低うし、禮を厚うして、陸中

山に、世を捐てゝ雪花風月を友としつつあつた孔明を、三たびまでも訪れて、その湧くがごとき才略をからむとしたのである。

孔明は、三國漢の軍師で諸葛亮、字は孔明、臥龍と號した琅邪の人である。身長八尺もあつたといふ。そして一旦俗世を厭ふてかくれた身ではあつたが、あまりの懇請に斷りかね、且は又、その知己の恩義にほだされたりして、遂に隆中の草廬を出て來た。神のごとき異才は、麻のごとく亂れた戰國の唯中に、その神謀をめぐらさむとするのである。風かるき臥龍の裝ひのまゝ、朝夕なれし假の庵をすてた孔明は、たゞ默々として出廬した。

當時天下の形勢如何にと見るに、後漢の帝室全く滅んで、魏に曹操あり、吳に孫權あり、孫權の勢ひは到底曹操に及ばなかつたが、それでもまだ、屈服するまでには至らず、諸方の戰ひに破れながらも、からうじて餘命を保つてゐた劉備はといへば、百斤の鐵棒を自由自在に振りまはすといふ關羽、張飛の猛將を率ゐてはゐたが、これとて曹操には齒も立たず、至るところに敗れて、もはや策の出づるところなく、遂に孔明に縋つたのである。

即ち中原の地は、曹操の占領するところなり、その勢威竝び立つものなく、天下は殆んど一手に握つてゐるかの觀があつた。

もとより孔明が、この狀態を知らぬ筈がない。彼は直ちに劉備に策を建てゝ云つた。

「曹操は今や日の出の勢ひで、百萬の大軍をもつて、天下に號令して居るのであるから、突然爭つても到底勝利を得ることが覺束ない。だから、武を用ふことを喜ぶ荆州と、要塞の堅固な益州とを占領し、敵に備へると共に內部をよく治め、孫權と和睦を結んで、形勢を見て居たならば、必ず天下に覇を唱へる時期が來るであらう」

劉備は、飛び上らむばかりに喜んで、早速その策をとることとし、孔明をば益々重用した。

二人の交りが次第に親密になつて、劉備が一も二も孔明の說にのみ從ふ有樣を見た舊來の將、關羽と張飛の兩人は、心中ひそかに快からず、猜みきらふ樣子があつた。早くもそれと察した劉備は、或時それ等の人々に向つて、

「我に孔明あるは、猶魚に水あるがやうなものである。我が天下に覇を唱へんとするに當つて

孔明の如き英才を得たことは、この上もなき幸ひと云はねばならぬ」

といつて諸將の猜疑をなだめたので、諸將も深く劉備の意中を察し、孔明に信賴して、再び猜むやうなことはなかつた。

英雄、英雄を知る。君臣水魚の交りは、やがて次第にその光芒を顯はし、劉備をして三國鼎立の基礎をかためさせたのである。

二、長板橋上の張飛將軍

劉備とともに荆州に劉踪といふ者があつた。曹操の大軍に襲はるゝのが恐しさに、戰はずして曹操に降參し、荆州を曹操に呈上してしまつた。劉備は、劉踪のだらしなさ加減に大いに驚いたが、後の祭りだつた。それで孔明ならびに諸將をひきゐて夏口に走つた。

荆州の地は最早劉備のものではなかつたが、その人民は何れも劉備の德になつき慕つてゐた

ので、曹操の下につく事は好まず、夏口に赴く劉備の後を逐うて、その味方についたものが、十餘萬の多きに上つた。

劉備は、この熱誠溢るゝが如き士民を率ゐて、湖北省の當陽まで走つた。

曹操は荆州に入ると共に、劉備が夏口に向つて去り、多くの士民がこれに從つたといふ噂を聞き、烈火の如く憤ると共に精鋭の騎兵三萬をすぐつて、長鞭一揮、夜を日について劉備の後を追ふこと二日、七十里ばかりの道程を馬蹄にかけて、當陽についた。

すわ敵軍來る！　と、劉備方は長板橋といふ橋を差挾んで迎へ擊つた。暫らくは兩軍息をもつかず攻め戰ひ、河水滔々として漲るほとり、人馬の雄たけびと、矢の唸りとは物凄く續いたが、何をいふにも劉備軍は、訓練された軍兵でなく、普通人民の集合した所謂烏合の衆であるのにひきかへ、曹操軍は、選りに選つた精兵である。またゝくひまに駈けなやまされて、劉備方は散々の敗北となり、劉備は孔明等と共に先に逃げのび、猛將張飛、僅かに二十餘騎を從へて、殿軍となつて味方の安全をはかつた。

打ち見やる對岸には、曹操三人の精兵が、戰勝の餘威物すごく、逃げゆく劉備の後を追はんとして雪崩のごとく長板橋を押し渡らんとしてゐる。張飛は、この有樣を眺め、味方を勵まして、橋をこぼち、河をさしはさんで、曹操の大軍に向ひ馬を陣頭に乘り進めて、一丈六尺の矛を水車のごとく振り巡らし、漆の如き長髪と、虎の如き鬚髯を風に吹き亂しつゝ、馬上に立ち上つて、遙かに曹操の勢を估つとにらんだ。その武者ぶりの美事さ、恐しさ、流石勝ち誇つた曹操勢も、思はず一歩たじろぐ時、

「我はこれ張飛なり。汝等來つて死を爭へ」

と、呼ぶ張飛の大喝が、あだかも雷の如く河面を壓してひゞき渡つた。曹操勢ははじめの勢ひも消え失せ、顏見合せて後退するばかりだつた。僅か一人の張飛は、かくのごとく、長板橋上、三萬の敵軍を叱咤したのである。張飛の大喝、豪傑の意氣よく三萬の軍を防ぎとめた間に、劉備も孔明も無事に夏口の陣に落ちのびた。

孔明によしや古今を空しうする奇才ありとも、敗餘の劉側には策の施し方もない。回天の雄

略、いたづらに時機の至るを待つの外はなかつた。——時に曹操は、長板橋に劉備を破り、勢ひに乗じて湖陵を占領し、一方劉備の陣せる夏口を窺ふと共に、直ちに揚子江を下つて江東の地に入り、一擧に吳の孫權をも蹴破らむと志し、まづ、書を孫權に送つて曰く、

「予に八十萬の水軍あり、今將に、揚子江を下つて、將軍と吳に雌雄を決せんとす」

このおどし文句の利き目は忽ちに現はれて、孫權はじめ吳の群臣等は、恐れ惑ふて策の出つる所を知らなかつた。曹操の武威の大なる戰はずして早や吳の上下を慄ひ上らせたのである。

吳國が、かくの如く上を下へと惑ひ騒ぐ時、はるか夏口の陣中に、密かに會心の微笑を洩らしたのは、英才諸葛孔明であつた。

寡勢をもつて僅かに餘命を保つ劉備の軍中に在つて、しかも、いま、吳の上下が恐れ惑ふ最中に當り、曹操八十萬の大軍をひかへて孔明はいかなる策略を案じ出したのか。

一日、孔明はひそかに夏口の陣を出て、一葉の船を洋々涯なき揚子江に泛べた。木の葉のごとく河心に浮んだ扁舟の上には、彼自身が乘り移つてゐる。無心の舟は、無心の流に從つて、

櫂のあがきもゆるやかに次第々々に江を下つてゆく。逝く水の流、扁舟上、苫を下して、智慮深き眼を河面に移したとき、英雄の胸中、萬感去來すること交々、陸中の草廬にあつたとき、附近の湖水に棹し、猿の聲を聞いた思ひ出もあつた。その身、いまや、天下を動かす神謀を抱いて、流に從つて江を下つた。逝く水の流と人の世と、はかり知られぬものは運命の導きである。

江を下つて孔明は、江東の吳の地に入つた。そして上下をあげて困惑の渦中にある孫權の陣中を、飄然として訪れた。說くところは、曹操の大軍決して恐るゝに足らぬこと、今や吳は劉備と爭ふの時でないから、共に力を協せて曹操にあたるのが得策であることなどであつた。

三、魏の艦隊全滅す

吳の上下は、救ひの神のやうに喜んで孔明をもてなした。三寸の舌の威力は、多年の恨を一

擲して、兩軍の合同を決定せしめたのである。

孔明は、なぜ曹操の軍を恐るゝに足らずとしたか。卽ちこゝに英雄の明らけき才略の閃めきがある。曹操は、すでに本據地たる魏を去ること程遠く、糧食に不足を感じつゝあるのみか、軍兵八十萬とは稱するものゝ、その實三十萬を越えず、しかもその多くが、純粹の魏の軍兵ではなく、新しく攻めとつた地の兵士であるが故に、その統一が十分でない。故に、たとへ少數なりとはいへ、劉備孫權の軍兵が決死の勇をもつて、ふるひ戰へば、勝利を博することは疑ひもない。

加ふるに、曹操の軍は、水軍とは稱するものゝ水に馴れた兵とは斷じて云へぬ。それに反して、味方は、南方、揚子江の流に親しんだものなるが故に水を恐るゝ如き軍兵ではない。進んで、江上に敵を迎へ討てば、勝を得ることは愈々たしかである。孔明の策はここに立脚したのであつた。

策成ると共に、合同も成つた。孫權はその將周瑜に精兵三萬を與へ、劉備は自ら手兵を提げ

て夏口を發し、揚子江上、赤壁山の麓に、勝ち誇れる魏の大軍を迎へ討つことゝなつた。劉備孫權つひに滅ぶか、或は勝つて三國鼎立の勢ひを示すか、天下分目の一戰は洋々たる長江の一區域、赤壁のほとりに開かれるのである。

南支那、一望の大平原は、吹きすさぶ寒風の下に凍つて、折々は雪をさへ伴ふ冬の季節であつた。河岸の揚柳も葉をふるつて、細い枯枝が糸のごとく風に戰いてゐる。海のごとくひろい長江は、雪解の水に岸をひたし、濁流漫々として、はるかの地平線につゞく。、岸に立つて靜かに見入ると、凄まじい濁流が渦まいてゐる。

水に馴れぬ魏軍は果して恐れた。檣をそろへた數多の戰艦もあまりの水勢に魂を奪はれて、赤壁山の麓の岸に陣取つたまゝ、河中に突進する勇氣もなかつたが、かくては果てじと、數百隻の戰艦、悉く舷をつなぎ合せて、互ひにたよりたよられ、動搖を防ぎながら、多數を恃んで襲ひかゝつてきた。

劉備の軍は陸上に、吳の周瑜の精兵は艦上にあつて、この敵艦の來襲を待つた。周瑜は敵狀

如何と眺めやれば、孔明の說いた通り、果して敵が水を恐れつゝあることは明らかに讀まれた。如何に衆を恃むとはいへ、味方は水中の戰に長じた江東の吳軍である。一擧にして破るは決して至難のことではない。進め！　とばかり、漫々たる濁流をついて、逆に敵軍目がけて進擊した。

水勢矢のごとき江上は、忽ち敵味方入りみだれての大接戰となつた。吳軍の活動は縱橫自在、散々に敵を混亂せしめ目にあまる大艦隊を散々に打ち破つた。

夕日がつめたく斷崖そゝり立て赤壁山に照らす頃、第一戰に不覺をとつた魏軍は、一まづ、艦列をたて直すべく岸に集つた。破れたとはいへ、大艦隊である。艦數よりいふも、戰鬪力よりも、まだ〳〵吳軍よりはるかに優勢である。勝つたとはいへ吳軍も、決して損害がなかつたのではない。長江の流凄まじき雄叫びを上げて奔騰する夕、兩軍は隊伍をとゝのへて第二戰準備にとりかゝつた。

明けて赤壁の第二日、斷崖の赫面を洗ふ河波は昨日に增してさらに凄じく、さながら、奔馬

の狂ふがごとく、轟々耳を聾する水音は、戰の悲慘を暗示するかのやうに鳴りひゞいた。

前敗の耻辱を雪がんため、且は又、前日の戰によつて幾分水に馴れた魏軍は新しく隊伍をとゝのへて、將に出動しようとした。

時に吳の周瑜の部下に黃蓋といふ者があつた。周瑜に向つて、奇策を獻じていふには、

「我軍は今風上にあるから、詐つて降參すると見せかけ、敵の油斷を見まして、火攻めの計をやつては如何であらう」

周瑜は大に喜んで、直さま一通の書を認めて曹操の許に送つた。

「我軍は、昨日の戰に於てこそ多少成績を得たが、今後永く大王の軍と對抗する勢ひは到底ない。戰つて後に滅ぶよりは、今、戰艦をひきゐて大王の軍門に降る方が得策だと思ふ。どうか我軍の降服を許していたゞきたい。許していたゞけるやうなれば、直に軍をひきゐて大王の許に參るであらう」

この書面は周瑜の名によつて記された。神ならぬ身の曹操、さては吳軍、わが威風に怖氣立

ち、全軍こぞつて降參すると覺えたり、幸ひ水戰に困り切つた折だから、早速許してやらうと、喜んで承知する旨を申し送つた。

得たり、とばかり、黃蓋は、數十隻の船に枯芝などを滿載し、その上に油を注いで、白い幕をもつて蔽ひかくし、烈風をうしろからうけて、根據地の北岸を出發し、魏の戰艦の集まつた南岸に向ひ、江を横ぎつて靜々と進んだ。

曹操は、愈々周瑜が約束通り、白布をかゞけて降參するものと思ひつめ、戰ひの準備もせず、敵の近づくのを待ち構へて居ると、彼我の間數町の近くになり、吳の船が魏軍の上流、しかも眞ともに烈風を背負ふやうになつた時、俄かに黃蓋は各船に點火の令を下した。忽ち數十隻の船は炎々たる猛火を乘せ、烈風に吹きあふられつゝ、流れにそふて眞一文字に、魏の戰艦の群り集ふ只中に突進してきた。

一大事！　と魏軍はあせり立つて、右に左に大混雜を來したがもう遲い。各船は互に聯結してあるから、急速の運動には至つて不便である。まご〳〵する內、火船は、この亂れた艦隊の

中に突入し、烈風のまゝに荒れまはつたから、火は忽ち全艦隊にうつつて、水上の一大火災、阿鼻叫喚の修羅の巷は、赤壁山下の江上に展開せられた。

燃えつくす船、沈む船、傾く船、焦げた木片、押し流され行く數多の軍兵、——火はまだ燃えつくさぬ船から船へ、白煙を上げてもえひろがつた。

魏軍の大狼狽につけ入つて、周瑜の艦隊は江上より、劉備の軍は陸上より散々に攻めつけたので、流石豪氣の曹操も、一たまりもなく敗れ去つて、覇權は夢のごとくその手を放れた。水聲滔々、戰場の名殘はあと形もなく流れ去つて、勝利にほゝえむ兩將の額に、光榮ある日はあざやかに輝いた。英雄の經綸は時代を創造するとかいふ。孔明の吳に說いたのは、こゝに事實となつて、孫權は吳に、劉備は蜀に、はた亦敗れたる曹操は魏に、所謂三國鼎立の基はここに築かれたのである。孔明についてはその後、蜀國の建設、劉禪の擁護、出師の表、五丈原頭の永逝等記すべきことは多いのであるが、赤壁戰に關係なきをもつて省略した。

第三　トラフアルガル大海戰

一、スペイン側より見た海戰

凋落する老大國イギリスでは、毎年十月二十一日を海軍の記念日としてゐるが、これは一方にてはイギリスをして海上の覇權を確定させ、他方では佛蘭西のナポレオン第一世の勇圖を煙と散らし霧と消えしめた第一因たる彼の有名なる一八〇五年（文化二年）のトラフアルガルの大海戰の記念日なることは云ふまでもなきことである。

しかし、この海戰として從來傳へられたものは概ね英國側の有利な文獻から出發したものが多く、スペイン側の資料は殆ど傳へられてゐないのである。私は一九一年十月二十二日發行の

「GRAPHIC」誌を見るとこの海戰の戰敗國たるスペイン側の實地目擊者某が畫いたといふ、この海戰の油繪を複製して發表してあり、該畫中此圖に關する小量な記事があつたから、御參考まで左に抄譯して御覽に入れたいと思ふ。

トラフアルガーの海戰の百年祭以來、英國海軍省はつとめてネルソン提督麾下に屬した軍艦名を現今の艦籍中に復活せんことを希望してきた、「ドレッドノート」「ベルロフオン」「テメレール」「ネプチユン」「コロッサス」「サンダラー」等は右のごとく復活せられた名號である。

また最近艤裝完成せられた最新式の大戰鬪艦もまた右の例に洩れず「オリオン」と命名せられ、この艦名が世上に再現したことすら、既に興味あることなのに、このごろ或筋からこの海戰の當時「オリオン」の艦長が或人に向つてなしたその際における實驗談の記事を得たが、また奇緣と云はねばならない。

この談話は、誰人かといへば、この海戰の當時、「オリオン」の艦長だつた人で後累進して海

軍大將となり、ナバリノ戰爭で大勝利を博したサー・エドワード・、コードリントンその人であつた。トラファルガル海戰の當時この「オリオン」はネルソン提督の旗艦で、先頭艦だつた「ビクトリー」より第九番艦の位置にあつた。コードリントン氏はその際、該海戰の初めより合戰場裡へ突進し、つひに終局に至るまで、十分に當日の狀態を目擊する餘裕と機會とを獲たといふことであるが、その談話せしところは次の通りである。

その日予は在艦中の尉官一同を上甲板に呼び出して、その戰場の光景を目擊せしめた。故に當日の狀態をとくに精細に實視したものは、予及び余の一同の者に如く者はないであらう。予は、まづスペインの旗艦たるサンタ・アンナ(アラバ提督座乘)が、すでに帆檣を挫打せられたのと、その對手たるローヤル、ソベリン(英の右翼先頭艦で中將コリン・クウードの旗艦)がやゝ損傷してゐるのを左舷に看過した。右舷側には、味方艦三、四隻と敵艦數隻との密接したまゝ砲火を交へてゐるのを瞰下しながら、進んで英艦「ビクトリー」佛艦「インドンテーブル」英艦

「テメレール」佛艦「ビューセントル」(佛西聯合艦隊司令長官ビルニューブ座乘)に接近した。

この時、前述の諸艦は、或は左右に相並んでゐるのや、或は前後に相接してゐるのがあつて、互にその兩舷側砲を發したり、互ひに襲擊隊をもつて他艦に闖入しつゝあつた。

敵味方からの砲彈は、雨と降り霰と散り、また雷と轟いた。しかし、わが艦にはさしたる損傷すら與へなかつた。そしてわが艦が予の考へる位置を占むるまでは、決して彈藥を徒消すべからずとは、かねて艦員一同に訓戒しておいたところであるが、わが艦員は、已の訓戒を破らず、よくこれを嚴守した。とくに沈着だつたことは予の榮譽とするところである。

たゞ時々とくに砲擊せんと欲してその志望を切なる餘り、打方始めの令を下さんことの請願を耳にしたのみでその他は至つて冷靜で皆予が號令に注意しつゝあつた。又四面における砲火の光景は、とくに慘烈を極はめたが、なほ彈藥節約の主義を固く守つてゐた。が、不幸なる佛艦スウイフトシューアが、甚しく損傷せられたといふのではないが後退しつゝあつたのを見るに及んで、これに一齊の砲火を集注したので、佛艦の三檣は忽ち轉倒した。續いてその國旗を

も降下した。

これよりさき予は幾回となく、予の艦員に他艦が彈藥徒消の弊に陷りつゝあるのを指摘し、極言してゐたが、この時に至つて始めて沈著なる擧動の尙ぶべきを證する好機を得たのである。

次に予は既に久しく英艦ビクトリーを惱まし、佛艦の二層甲板艦に接近せんとしたところ、わが艦より二番目の前方にあつた英艦アジャックスが、偶然その間に入つてきたので、予は近距離より時々砲擊することが出來た。

こゝに於て予は、「プリンス・オブ・アスチユリアス」(聯合艦隊の提督グラビナ座乘)に向つて進航したが、英艦ドレッドノートは、再びここに來り會し前路を遮つたが、前のアジャックスの時のごとく、なほ幾分かの砲擊餘地を餘したので、やゝ長時間予のあまり好まざる遠距離砲擊を續行せざるを得なかつた。そして、わが艦も、この敵より數彈を受けたが、凡そこの海戰中わが艦とプリンス・オブ・アスチユリアスとは、三回遠距離砲火を交換したが、敵はつひに接

戰するのを好まずして迹げ去つた。

二、オリオン艦の功績

次いで味方艦リビアザンガが裝砲七十四門の西艦サン・オーガスチン(此時まだ戰鬪線に入らない西艦及佛艦は九隻あつて、いづれも便風に乘じてゐた。オーガスチンはその先頭にあつたので他の西艦及佛艦がこれを擁護せんとする形勢であつた)に對し、勇ましく砲戰するのを見て、予は直ちに、リビアザンを援助せんがために展帆した。

しかるに敵から來援したものは、佛艦イントリピートのみであつて、この艦は下手廻し(順次に艦首を風から離れさせ遂に他舷側より風を受けしむるごとくする操帆の一術である)をして來て、リビアザンに向つて優越な砲擊をしてゐた。

時恰もリビアザンが、西艦オーガスチンを捕獲中だつたので、イントリピードは、またこの

「オーガスチン」を砲撃した。又この時一二隻の味方艦がイントリーピードに對し、遠距離砲撃をしつゝあつたから、予は初めこの味方附近を通過しやうとし、數回操帆術を試みたが、その效がなかつたので、つひに味方艦アジアクスの船尾に出るために、惣帆に裏帆を打たせ、次いでリビヤザンの艦首に接近して、これを通過するために急に惣帆に風を含ましめるやう艦を操縱せんとした。

この時、リビアザンは、予の行動を見ると喝采して同意を表した。且笑ひながら、予の操帆術の機宜に適したのを喜び、十分風上に出てわが右舷側砲で敵イントリピードの右舷後部を襲撃し次で漸次艦首を廻して、敵の艦尾に出、その左舷側を通過してこれよりその左舷艦首に出んことを望む旨を告げた。

予はその言のやうに操帆を敏活に遂行することは出來なかつたが、かくのごとく信頼を得、かくのごとく同情を得たのは予の特に欣喜せしところである。

これより前、イントリピードは、我檣倒れ我舵挫くにあらずんば斷じて旗を卷いて降を乞ふ

ことなし、と唱へてゐたのであるが、味方の行動が特に優秀だつたので、敵の災害を破るに先立つて、敵のその廣言を踏みつぶし降服せしむるに至つたのである。

わが艦の受けた損害は、敵味方の孰れより來たものか判然しない敵彈を除いては、ブリンス・オブ・アスチユリアより放つたものゝみであつた。予は敵艦一隻のために妨げられてその意を達することが出來なかつた。

以上のごとく、詳細の戰況を語るに當り、予は決してわがオリオンが他艦よりも、多大の功績が有るといふことを主張するものではない。若し予が言にかくの如き印象ありとせば、予は榮譽心に馳られたりとの誹りを免かれることは出來ないであらう。

凡そ味方艦中始めに戰鬪場に入つたものは、敵に對してなすべき業は特に多かつたのである。諸艦は皆皆よく死力を盡してこれを遂行した。そしその排除なし得た多くの艱難とその受けたる多大の災害とは、各其程度によつて相當の榮譽をもつて繕はれて居る。予のオリオンに就いて云はんと欲するところは、この艦は戰場に於て爲すべき一切の業を終始一貫してこれを

沈着に施行したことゝ、常に十分の效果を得んがために彈藥の消耗を節約せんとて、災厄中に投ずることはなさなかつたが、味方艦を援助するには時に周到なる注意を以てした。云々。

本年竣功のオリオンもまたトラフアルガル海戰の當時のやうに、好艦長を得て名譽を發揮せんことを希望したいのである。

またトラフアルガル紀念日に關し、このグラフイック誌に掲ぐる數件の畫は、特に興味を惹く次第であるが、その上部兩端に現はせるは共にネルソン提督の旗艦ヴイクトリーの艦首の像即ち鷲首であるが、向つて左隅に出せるはこの艦が、この大海戰中裝著せしものであつて、二人の神童が俗に國民の楯と稱する古代の楯を擁護して居る像である。(無垢の天人の幼兒であつて、肩に兩翼を著けて居る)

これはこの大海戰後ビクトリーが、ネルソンの屍體を乘せて、英國のスペクトッドに到着した時、有名なる戰爭畫家のゼ・シューキーと云ふ人が、一隻の端艇上から實寫したものである。又右方に現はしあるは、一人の水兵と一人の海兵とが以前と同樣の楯を擁護して居る像であるが、これは海戰後、ビイクトリーがチヤタムに於て修理した後、前の船首の像と取換へられたのである。此後の船首の像は、一八一六年までに十年間使用せられたが、此年また元の神童のものに取換へられた。而して海戰當時の船首の像がどうなつたかは判然してゐない。

トラフアルガル海戰の當時に用ひられた數多の帆は、孰れも彈痕だらけのものであつたが、其中フオールトツプスル(前檣に下より二番目に掛ける帆)とメイントツプスル(中檣)とは他の諸帆とともに皆チヤタムの造船場に格納してあつたが、漸次取出し截り裂いて船渠用に使用したが、唯前に掲げた、二帆のみが見落されたと見えて殘つてゐたが、一八七五年に取り出して其時分ビイクトリーの碇泊して居つたポーツマウスに送られて今でも保存してある。其フオールトツプスルには、六十個の彈孔メイントツプスルには九十以上の彈孔が穿たれて居つて、當年の戰狀も偲ばるゝ次第である。

また上部に掲げあるは、ネルソンをして黄泉の客たらしめた銃丸一箇であるが、これは一八〇〇年十二月にビクトリーが、スピツーヘッドに到着した時、醫師ベアッチー氏が抜き出した儘を顯はしたのであるが、同醫師はこの銃丸を盒子に納め終身これを秘藏した。然るにその死後その兄弟の一人が、ビクトリア女王に捧呈したが、其後は現代陛下の最も秘藏せらるる品だとのことである。

三、海戰を物語る繪畫

海戰中、佛國海軍士官の一人がものした四枚の鉛筆畫といふものがあるが、同士官が此畫を仕上げたのは、一八〇六年の一月英國リーヂングに捕虜となつて滯在してゐた時である。同氏はこれを佛國リダブテーブルの艦長ルーカン氏に贈つたが、此艦長の後裔はこれを佛國ルーブル博物館に献納し今以て之を掛けてある。

又、大幅畫を西班牙の、一士官が此海戰を三齣に分けて描いて居る。此士官は海戰後間もなく捕虜としてジブラルタルに送られ次いで同所にてコリングウードによつて釋放せられたが此畫は今でもマドリツドのビブリオテカ・ナショナルと云ふ博物館に掛けてゐる。

最後にスペイン側より見たるトラファルガルの海戰圖について詳細に解說して見やう。當時のスペインの畫より取つたもので、海戰を三齣に分ち各その戰況を示してあるが、此圖はもと西班牙艦隊の旗艦サンタアンナ乘組の一士官の筆に成つたもので、同艦が英國提督コリングウードの旗艦ローヤルソベレインの爲に捕獲せられたる後、此の士官はジブラルタルにて釋放せられて、カデスに歸り、それよりメキシコに送られたが、此圖はメキシコに於て完成せられたものといふ。其圖は鳥瞰的畫法によつて、海戰の開戰前、開戰の初期及び戰鬪酣戰終期の三戰況を表はしてゐる。

開戰前の光景を見ると、圖の上方に於てやゝ横陣に類する陣形をなせる數多の軍艦は、佛西聯合艦隊で、その後方に於て少し左方に偏し並列するのはネルソンの率ゐる英國艦隊である。

時は十月二十一日午前十時前後の狀況を示すものであらう。微風折しも西方より來つたので、英國艦隊は稍々風上の良位置を占めてゐた。

開戰の初期、圖の中央に於て、稍々凸字形の長列をなせるは三十餘隻よりなる佛西聯合艦隊を示し、その約中央にある。一大艦はスペインのサンチシマ、トリニダットで全隊中の最巨艦である。その次位にあるのは、聯合艦隊司令長官ベイルヌーブ坐乘の佛艦ビユセントールである。

ビユセントールより左方九番目にあるのは、スペインのサンタアンナ號で、アラバー提督の旗を揭げ、列の殿後卽右端にあるはプリンス・オブ・アスチユリアスでグラビナ提督の旗を飜へしてゐる。

右の長列の內方で二列縱陣をなせるは、英國艦隊で、その左翼先頭艦はコリングウード提督坐乘のローヤルソベレイン、右翼先頭艦は卽ちネルソン提督坐乘のビクトリーである。これは同日午後一時前後卽ちネルソン提督戰死前約半時の光景であらう。

戰鬪の終期の圖を見やう。圖の下方にて砲煙海を罩めて敵味方混鬪する狀況は、海戰の終期に近きとき、卽ち午後三時過ぎの光景を示せるものである。各艦の傍に各西班牙語をもつて艦名を示してあるやうなれど、歲月久しきため、磨滅して明らかではない。讀者もし上部の二齣に對照しまた當時の海戰史を參考してその艦が何であるかを默契するのもまた一興かとおもふ

記事は以上で終つてゐる、ここに當時のグラフイック誌から寫眞の復寫を爲し得なかつたのは甚だ殘念千萬である。その點大方の御寬恕を得ておく。

昭和十七年五月二十四日印刷
昭和十七年五月二十七日發行

不許複製

(停)定價貳圓也

著作者　松尾樹明
東京市神田區鍛冶町二ノ二
發行者　尾崎楠太郎
東京市京橋區築地一ノ十四
印刷者　川橋源三郎
東京市京橋區築地一ノ十四
印刷所　仁川堂　川橋印刷所
配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區鍛冶町二ノ二
發行所　株式會社　忠誠堂
電話神田(25)〇二〇七番
振替東京一五五一〇〇番

文協承認番號　ア60183番
文協會員番號　117021番

	書名	著者	定價
既刊	東郷元帥・詳傳	子爵 小笠原長生	一五、〇〇(〒三〇)
	努力論	文學博士 幸田露伴	二、〇〇(〒一四)
	明治天皇御製類集	宮内省御歌所參候 男爵 藤枝雅修	一、三〇(〒一四)
	涙の陸戰隊	福田善念	一、五〇(〒一四)
	大將の母	福田善念	一、五〇(〒一四)
	親鸞と九條武子	松尾樹明	二、〇〇(〒一四)
近刊	大東亞の神國日本の皇室	坂本箕山	一〇、〇〇(〒三〇)
	昭憲皇太后御集(類纂)	宮内省御歌所參候 男爵 藤枝雅修	一、三〇(〒一四)

46
70